

キャロライン・ブービエ・ケネディ駐日米国大使が本学を訪問
本学職員表彰を実施
北海道大学一般入試（前期日程・後期日程）の実施と合格者の発表





キャロライン・ブービエ・ケネディ駐日米国大使が本学を訪問



平成26年度「北海道大学TF研修会」

1 新渡戸カレッジの創設とその推進を目指して

全学ニュース

- 2 キャロライン・ブービエ・ケネディ駐日米国大使が本学を訪問
- 3 本学職員表彰を実施
- 3 「総長主催記者懇談会」を開催
- 4 北海道大学一般入試（前期日程・後期日程）及び私費外国人留学生入試の実施と合格者の発表
- 7 平成26年度外国人留学生歓迎・送別懇談会を開催
- 8 留学生センター日本語研修コース修了式（2014年10月入学者）
- 9 現代日本学プログラム課程創設記念講演会を開催
- 10 平成26年北大ペンハロー賞授与式を挙行
- 10 平成26年度「北海道大学TF研修会」を開催
- 11 新渡戸スクール国際シンポジウム「大学院教育改革－専門性と+aをいかに学生に獲得させるか－」を開催
- 12 北大フロンティア基金
- 13 COI-T「食と健康の達人」拠点がCOI拠点へ昇格
- 13 第6回COI-Tプログラム「『食と健康の達人』拠点」参画機関会議を開催
- 14 COI-Tワークショップ in 岩見沢を開催
- 14 平成26年度「ふるさと北海道応援フォーラム」に参加
- 15 第12回創成シンポジウム「感染症研究の最前線－エボラ・結核を例に－」を開催

部局ニュース

- 16 駐日オーストラリア大使御一行が農学院・農学研究院・農学部を訪問
- 16 農学院・農学研究院・農学部で北海道建設部と砂防分野において連携・協力に関する覚書を締結
- 17 教育学研究院・公州大学校師範大学10周年記念ジョイントシンポ2014を開催
- 18 環境健康科学研究教育センターでマレーシア科学大学との学術交流を実施

- 19 薬学研究院で国際シンポジウム“Understanding and care of neurodegenerative diseases”を開催
- 19 薬学研究院で合同シンポジウム「創薬に関するインフォマティクスの潮流－基礎、臨床、ビジネスまで－」を開催
- 20 先端生命科学研究院でFDSD研修会「総会2014」を開催
- 21 生命科学院・先端生命科学研究院等でPBL実践のためのファシリテーター養成講座を開催
- 22 文学研究科で大学院生が総合博物館「産学連携」展示を制作
- 23 総合博物館で「卒論ポスター発表会」を開催
- 24 附属図書館で北海道地区機関リポジトリ実務担当者研修「出版社の著作権ポリシーを読む」を開催
- 24 附属図書館で雪像展示とアイスキャンドル点灯
- 25 低温科学研究所でスノーランタンによるライトアップを実施

レクリエーション

- 25 教職員サッカークラブが平成26年度 第27回札幌社会人フットサルリーグに出場

定年退職を迎えるにあたって 26

諸会議の開催状況 48

学内規程 49

表敬訪問

- 49 国内
- 50 海外

人事 51

訃報

- 52 名誉教授 八木 康一 氏



駐日オーストラリア大使御一行が農学院・農学研究院・農学部を訪問



環境健康科学研究教育センターマレーシア科学大学との学術交流を実施



文学研究科大学院生が総合博物館「産学連携」展示を制作



附属図書館雪像展示とアイスキャンドル点灯

表紙：一般入試前期日程の合格発表（2015.3.7、関連記事4頁に掲載）

裏表紙：北の鉄道風景²⁴ 去り行く寝台列車

新渡戸カレッジの創設と その推進を目指して

副学長 やまぐち 山口 じゅんじ 淳二



私が新渡戸カレッジ（副学長）担当の副学長となり、ほぼ1年がたちました。ここでは、これまでの経緯や個人的な感想について述べさせていただきます。

新渡戸カレッジ創設の経緯

新渡戸カレッジは、グローバル人材を育成するための学部横断的特別教育プログラムとして、2年前、平成25年4月に創設されました。学部や学科の垣根を越えた学習環境を提供するという意味で、“カレッジ”と命名し、全入学者の約8%にあたる200名を定員としました。入校生（カレッジ生と称します）には、共に学ぶ新渡戸カリキュラムが提供されます。このカリキュラムを通して、本学が目指す教育目標に加え、1) グローバルなコミュニケーションツールとしての英語能力、2) チームワーク力・リーダーシップ力、3) 多文化状況の中での課題解決能力、4) 世界の中での日本人としての自覚、ならびに5) グローバル社会でのキャリア形成力、という5つの能力・マインドをもった人材の育成を目指しています。

新渡戸カレッジは、日本人学生を留学させグローバル人材へと導くための文部科学省の「グローバル人材育成推進事業」に応募するために構想されたものです。つい最近、このプログラムの中間評価が公表されました。本学の取り組みはS評価を得ることができました。その意味では一見極めて順調と思われませんが、実際の運営はそうではありませんでした。新渡戸カレッジは、ある意味全く新しい試みであったこともあり、想定外のことが頻繁に起こりました。多くの懸案に対処するため、急きょ関係メンバーによる幹事会を設け対処しましたが、それでも不十分でした。このような1年目の経験から、現場に指揮官を配置すべきとの判断となり、開校2年目にして、「言いだしっぺ」の私が副学長になったという次第です。新渡戸カレッジ校長は山口佳三総長ですので、私の立場は、高校でいうところの「教頭」みたいなものだとして自覚しています。

新渡戸カレッジ・フェロー制度

新渡戸カレッジの特徴のひとつに本学同窓会組織に支えられた「新渡戸カレッジ・フェロー制度」があります。新渡戸カレッジには、私以外の副学長として、北海道大学連合同窓会会長が就任されています。この事実が大学と同窓生が連携して運営するというプログラムの特色をよく表していると思います。新渡戸カレッジ・フェローは、グローバル人材のロールモデルとして、海外で活躍された経験をお持ちの本学同窓生から選ばれます。1学年あたり10名のフェローをカレッジ生の担任に委嘱し、フェローによる講演会、ミーティング、合宿等を通じて、またカレッジ生のよき理解者・助言者として、彼らの自律的な成長を見守り、支える役割を担います。フェローの教育力は極めて高く、これまで家族や教員以外の大人とあまり親しく接触したことがないカレッジ生にとって新鮮な刺激となっています。フェローとの対話を通して、カレッジ生は、実社会を意識し、自身のキャリアパス形成を促す良い機会が得られています。このようにフェローを介した実社会との連携を通じて、新渡戸カレッジでは、従来の座学による教育とは異なる同窓生とともに作り上げてゆく柔軟な教育システムの確立を目指しています。

新渡戸カレッジは、本学の国際化を加速させるための先駆けとして発足しました。新渡戸カリキュラムは、学部横断型の教育プログラムであり、総合大学としての本学の強みを生かした国際通用性をもつプロフェッショナル集団の育成を目指しています。新渡戸カレッジに代表される大学の国際化の試みは、まさに緒についたばかりです。本学では、その第二の矢として、今年度スーパーグローバル大学創成支援事業に採択されました。これらは、日本の大学のありようを大きく変える試みなのかもしれません。

皆様のご協力をお願い申し上げます。

■全学ニュース

キャロライン・ブービエ・ケネディ 駐日米国大使が本学を訪問

キャロライン・ブービエ・ケネディ 駐日米国大使が2月4日（水）、本学を訪問されました。

ケネディ大使はまず北海道大学病院を訪れ、陽子線治療センターを視察されました。

安田和則理事・副学長の出迎えでセンター内に案内されたのち、寶金清博病院長、白土博樹陽子線治療センター長と挨拶を交わされ、センターの施設や装置について説明を受けました。

ケネディ大使は、模型を用いた施設の概要説明、梅垣菊男陽子線治療セン

ター副センター長による加速器室の説明、白土センター長による制御室や治療室の説明に興味深く聞き入られていました。

陽子線治療装置の開発の経緯や、本治療センターの特徴、治療の実態や米国の大学・医療機関との連携などについて説明を受けると、ケネディ大使からは治療患者数や、治療できる臓器の種類などについて質問があり、従来のエックス線治療よりも多様な臓器や大型の腫瘍に対して治療が可能であることに感心された様子でした。

陽子線治療センター視察後は、事務局にて山口佳三総長から歓迎の挨拶を受け、その後、米国で交換留学を経験した9名の学生と懇談を行われました。

学生との懇談では、ケネディ大使から学生へ、米国での留学生活の感想や日米の教育の違い等について質問があり、学生達は留学で身につけた流暢な英語で積極的に意見を述べ、和やかな雰囲気の中で活発な意見交換が行われました。

（国際本部国際連携課、北海道大学病院）



模型を用いて概要説明をする白土センター長



加速器室で陽子線が作られる過程を説明する梅垣副センター長



陽子線治療について熱心に聞くケネディ大使



記念品接受後の記念撮影



山口総長及び学生との集合写真



学生との懇談の様子

本学職員表彰を実施



被表彰者と山口総長ほか列席者

2月27日（金）、総長室において「北海道大学職員表彰」表彰式を行い、関係者列席のもと、山口佳三総長から被表彰者に、賞状及びメダルが授与されました。

この表彰は、職務上顕著な功績等があった方及び職務外において職員の模範として表彰に値する善行を行った方を対象とするものです。

このたび表彰された方々は、永年にわたりガラス製実験装置製作等の業務に従事し、光学用特殊セルの開発等に多大な貢献をされた電子科学研究所技術専門員 太田隆夫氏、ガラスナノインプリント技術を応用したスピン量子十字デバイスの研究開発に取り組み、ナノ電極形成の研究開発に初めて成功された電子科学研究所技術専門職員

笠 晴也氏、ベトナム社会主義共和国において医療活動・現地医療者への技術指導・住民への生活指導等積極的に医療ボランティアを行われた北海道大学病院看護部副看護師長 菅野 香氏の3名です。

（総務企画部人事課厚生労務室）

「総長主催記者懇談会」を開催

2月16日（月）、本学事務局特別会議室において、3回目となる「総長主催記者懇談会」を開催しました。報道機関とのより良いコミュニケーションを図るために実施しており、各社から記者8名の出席がありました。本学からは、山口佳三総長、三上 隆理事・副学長、上田一郎理事・副学長、安田和則理事・副学長、村田直樹理事・事務局長が出席しました。

冒頭、山口総長から「北海道大学近

未来戦略150」の策定、「スーパーグローバル大学創成支援」への採択、「北極域研究センター」の設置など、本学のビジョンや新たな取り組みについての説明があり、その後、記者の方々との懇談に移りました。

記者からは新渡戸カレッジや新渡戸スクール、4月に設置される「産学・地域協働推進機構」などについて質問があり、和やかな雰囲気での懇談が進みました。

会の最後には、山口総長から「今後もこのような懇談会を開催し、本学のアピールにつなげていきたい」との発言がありました。

なお、当日席上には、今後の取材活動に利用していただくため、最新の取り組みに関する資料や広報誌を配付し、情報発信に努めました。

（総務企画部広報課）



記者懇談会の様子

北海道大学一般入試（前期日程・後期日程）及び私費外国人留学生入試の実施と合格者の発表

平成27年度一般入試の前期日程試験は2月25日（水）・26日（木）に、後期日程試験は3月12日（木）に実施しました。また、私費外国人留学生入試第2次選考は2月19日（木）に実施しました。各試験の実施状況等は、次のとおりです。

1. 前期日程

志願者は5,705名で、このうち、本学が指定した大学入試センター試験の受験を要する教科・科目を受験していなかった失格者が5名いました。また、2段階選抜の第1段階選抜を行った結果、志願者全員が合格し、受験対象者は5,700名で、受験者は5,538名でした。

合格者は2,092名で、合格発表は、3月7日（土）午前9時に高等教育推進機構正面玄関に合格者の受験番号を掲示するとともに、本学ホームページに掲載しました。

なお、合格者の出身高校別では、道内高等学校出身者が863名で全体の41.3%。卒業年度別では、平成27年3月高等学校卒業者が1,295名で全体の61.9%。また、男女別では女子が648名で全体の31.0%でした。

2. 後期日程

志願者は4,129名で、このうち、本学が指定した大学入試センター試験の受験を要する教科・科目を受験していなかった失格者が2名いました。また、2段階選抜の第1段階選抜を行った結果、4,119名が合格し、受験対象者は4,119名で、受験者は1,827名でした。

合格者は551名で、合格発表は、3月20日（金）午後4時に高等教育推進機構正面玄関に合格者の受験番号を掲示するとともに、本学ホームページに掲載しました。

なお、合格者の出身高校別では、道内高等学校出身者が142名で全体の25.8%。卒業年度別では、平成27年3月高等学校卒業者が316名で全体の57.4%。また、男女別では女子が132名で全体の24.0%でした。

3. 私費外国人留学生入試

私費外国人留学生入試の志願者は110名で、第1次選考の合格者は37名、第2次選考の受験者は29名、合格者は15名でした。

（学務部入試課）

平成27年度一般入試（前期日程）合格者数等一覧

学部・学科等		募集人員	受験対象者	欠席者	受験者	倍率	合格者		
総合入試	文系	100	249 (66)	11 (0)	238 (66)	2.4	115 (31)		
	理系	数学重点選抜群	130	628 (125)	21 (4)	607 (121)	4.7	139 (24)	
		物理重点選抜群	235	722 (96)	17 (5)	705 (91)	3.0	251 (23)	
		化学重点選抜群	235	689 (187)	17 (4)	672 (183)	2.9	251 (73)	
		生物重点選抜群	177	474 (203)	11 (4)	463 (199)	2.6	189 (69)	
		総合科学選抜群	250	526 (172)	15 (6)	511 (166)	2.0	268 (97)	
学部別入試	文学部	118	379 (197)	7 (4)	372 (193)	3.2	128 (58)		
	教育学部	20	61 (31)	1 (1)	60 (30)	3.0	22 (13)		
	法学部	140	246 (88)	3 (0)	243 (88)	1.7	147 (54)		
	経済学部	140	391 (99)	5 (0)	386 (99)	2.8	154 (35)		
	医学部	保健学科	医学科	97	294 (64)	16 (1)	278 (63)	2.9	102 (20)
			看護学専攻	60	164 (146)	10 (9)	154 (137)	2.6	68 (61)
			放射線技術科学専攻	28	84 (31)	1 (0)	83 (31)	3.0	30 (12)
			検査技術科学専攻	28	85 (47)	3 (2)	82 (45)	2.9	30 (15)
			理学療法学専攻	13	35 (19)	3 (3)	32 (16)	2.5	14 (9)
			作業療法学専攻	13	37 (27)	1 (1)	36 (26)	2.8	15 (13)
			歯学部	30	150 (51)	8 (2)	142 (49)	4.7	30 (12)
	獣医学部	20	98 (36)	2 (0)	96 (36)	4.8	22 (9)		
	水産学部	105	388 (82)	10 (2)	378 (80)	3.6	117 (20)		
計	1,939	5,700 (1,767)	162 (48)	5,538 (1,719)	2.9	2,092 (648)			

※ () 内の数字は、女子で内数。

平成27年度一般入試（後期日程）合格者数等一覧

学部・学科等		募集人員	受験対象者	欠席者	受験者	倍率	合格者		
学部別入試	文学部	37	287 (122)	173 (73)	114 (49)	3.1	41 (18)		
	教育学部	10	89 (43)	38 (19)	51 (24)	5.1	11 (6)		
	法学部	40	276 (82)	173 (46)	103 (36)	2.6	48 (13)		
	経済学部	20	186 (39)	122 (22)	64 (17)	3.2	25 (3)		
	理学部	数学科	13	120 (10)	60 (4)	60 (6)	4.6	14 (1)	
		物理学科	5	93 (6)	56 (2)	37 (4)	7.4	9 (2)	
		化学科	23	164 (19)	86 (8)	78 (11)	3.4	27 (4)	
		生物科学科 生物学専修分野	10	84 (24)	39 (9)	45 (15)	4.5	11 (3)	
		生物科学科 高分子機能学専修分野	5	47 (14)	34 (10)	13 (4)	2.6	6 (3)	
		地球惑星科学科	5	59 (10)	35 (3)	24 (7)	4.8	6 (0)	
	医学部	保健学科	放射線技術科学専攻	7	68 (35)	43 (20)	25 (15)	3.6	7 (5)
			検査技術科学専攻	7	74 (49)	47 (33)	27 (16)	3.9	7 (4)
			理学療法学専攻	4	36 (10)	22 (6)	14 (4)	3.5	4 (2)
	歯学部	8	120 (50)	53 (25)	67 (25)	8.4	10 (4)		
	薬学部	24	271 (105)	148 (47)	123 (58)	5.1	28 (10)		
	工学部	応用理工系学科	34	261 (30)	145 (16)	116 (14)	3.4	38 (8)	
		情報エレクトロニクス学科	38	237 (14)	141 (7)	96 (7)	2.5	38 (2)	
		機械知能工学科	30	330 (16)	179 (8)	151 (8)	5.0	32 (2)	
		環境社会工学科	53	341 (49)	165 (22)	176 (27)	3.3	57 (12)	
農学部	53	441 (128)	262 (74)	179 (54)	3.4	59 (14)			
獣医学部	15	118 (50)	48 (21)	70 (29)	4.7	15 (6)			
水産学部	50	417 (104)	223 (58)	194 (46)	3.9	58 (10)			
計	483	4,119 (1,009)	2,292 (533)	1,827 (476)	3.8	551 (132)			

※ () 内の数字は、女子で内数。

平成27年度私費外国人留学生入試合格者数等一覧

学部・学科等

学部・学科・専攻・コース等		志 願 者		第1次選考合格者		第2次選考受験者		合 格 者	
文学部	人文科学科	10	(3)	1	(0)	1	(0)	0	(0)
教育学部	教育学科	1	(1)	1	(1)	1	(1)	0	(0)
法学部	法学課程	5	(1)	0	(0)	0	(0)	0	(0)
経済学部	経済学科	7	(1)	2	(0)	2	(0)	1	(0)
	経営学科	4	(1)	1	(1)	1	(1)	0	(0)
理学部	数学科	2	(0)	2	(0)	1	(0)	1	(0)
	物理学科	4	(1)	2	(1)	2	(1)	1	(1)
	化学科	3	(1)	0	(0)	0	(0)	0	(0)
	生物科学科	3	(1)	1	(0)	1	(0)	1	(0)
	(生物学専攻分野)	2	(0)	1	(0)	1	(0)	1	(0)
	(高分子機能学専攻分野)	1	(1)	0	(0)	0	(0)	0	(0)
	地球惑星科学科	1	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)
医学部	医学科	2	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)
	保健学科	2	(0)	2	(0)	2	(0)	1	(0)
	看護学専攻	-	(-)	-	(-)	-	(-)	-	(-)
	放射線技術科学専攻	-	(-)	-	(-)	-	(-)	-	(-)
	検査技術科学専攻	1	(0)	1	(0)	1	(0)	0	(0)
	理学療法学専攻	-	(-)	-	(-)	-	(-)	-	(-)
	作業療法学専攻	1	(0)	1	(0)	1	(0)	1	(0)
歯学部	歯学科	-	(-)	-	(-)	-	(-)	-	(-)
薬学部	薬科学科	1	(1)	1	(1)	1	(1)	1	(1)
	薬学科	-	(-)	-	(-)	-	(-)	-	(-)
工学部	応用理工系学科	12	(6)	7	(3)	5	(1)	3	(1)
	応用物理学コース	1	(0)	1	(0)	1	(0)	0	(0)
	応用化学コース	7	(6)	4	(3)	2	(1)	2	(1)
	応用マテリアル工学コース	4	(0)	2	(0)	2	(0)	1	(0)
	情報エレクトロニクス学科	12	(5)	4	(3)	2	(1)	2	(1)
	情報理工学コース	4	(0)	1	(0)	1	(0)	1	(0)
	電気電子工学コース	1	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)
	生体情報コース	2	(2)	2	(2)	1	(1)	1	(1)
	メディアネットワークコース	2	(2)	0	(0)	0	(0)	0	(0)
	電気制御システムコース	3	(1)	1	(1)	0	(0)	0	(0)
	機械知能工学科	18	(0)	3	(0)	2	(0)	1	(0)
	機械情報コース	5	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)
	機械システムコース	13	(0)	3	(0)	2	(0)	1	(0)
	環境社会工学科	11	(5)	4	(2)	3	(1)	2	(1)
	社会基盤学コース	-	(-)	-	(-)	-	(-)	-	(-)
	国土政策学コース	-	(-)	-	(-)	-	(-)	-	(-)
	建築都市コース	8	(4)	2	(1)	2	(1)	2	(1)
衛生環境工学コース	1	(0)	1	(0)	1	(0)	0	(0)	
資源循環システムコース	2	(1)	1	(1)	0	(0)	0	(0)	
農学部	生物資源科学科	1	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)
	応用生命科学科	3	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)
	生物機能化学科	1	(1)	1	(1)	1	(1)	1	(1)
	森林科学科	1	(1)	1	(1)	1	(1)	0	(0)
	畜産科学科	-	(-)	-	(-)	-	(-)	-	(-)
	生物環境工学科	-	(-)	-	(-)	-	(-)	-	(-)
	農業経済学科	2	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)
獣医学部	共同獣医学課程	1	(1)	1	(1)	1	(1)	0	(0)
水産学部	海洋生物科学科								
	海洋資源科学科								
	増殖生命科学科	3	(2)	3	(2)	2	(1)	0	(0)
	資源機能化学科								
合 計		110	(32)	37	(17)	29	(11)	15	(6)

※ () 内の数字は、女子で内数。

国・地域別

国・地域	志 願 者		第1次選考合格者		第2次選考受験者		合 格 者	
ウクライナ	1	(0)	1	(0)	1	(0)	1	(0)
ベトナム	1	(1)	0	(0)	0	(0)	0	(0)
韓国	18	(4)	7	(2)	6	(2)	2	(0)
台湾	1	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)
中国(香港を含む)	89	(27)	29	(15)	22	(9)	12	(6)
合 計	110	(32)	37	(17)	29	(11)	15	(6)

※ () 内の数字は、女子で内数。

平成26年度外国人留学生歓迎・送別懇談会を開催



留学生と山口総長・北海道大学国際婦人交流会



ミャンマーの留学生によるダンス



インドネシアの留学生によるダンス

2月16日（月）、京王プラザホテル札幌において、平成26年4月以降に新たに入学した留学生の歓迎、並びに本年3月に勉学や研究を終えて卒業する予定の留学生の祝賀を兼ねた総長主催の懇談会を開催しました。当日は留学生をはじめ、在札幌外国公館、留学生支援団体の方々のほか、各部局長、指導教員の先生など、約420名の出席がありました。

懇談会は、山口佳三総長の挨拶に始まり、続いてロシア連邦総領事館アタッシェのナデズダ・ベレズニャツカヤ氏から来賓を代表してご挨拶いただきました。

続いて、上田一郎理事・副学長の乾杯で開会し、平成26年度に入学した留学生を代表して、現代日本学プログラム課程入学前の予備教育である日本語研修コース研修生のグエン クイン リンさん（ベトナム）が北海道で出会った人達の温かさ、熱心に指導してくれた先生への感謝の気持ち、そして将来の希望と意気込みを語りました。次に、卒業する留学生を代表して、文学研究科修士課程のコウ リケイさん（中国）が渡日した際の頃のエピソードや、新入生に対しての激励の言葉と卒業生への祝福の言葉を述べ、最後は学校生活を送る上でお世話になった全

ての方々への感謝の言葉で締めくくりました。

スピーチの後、引き続き留学生と指導教員をはじめ、大学関係者や留学生支援団体の方々との懇談の輪が広がり、6名のミャンマーの留学生と3名のインドネシアの留学生によるダンスの余興もあり、楽しい交流の一時となりました。

最後に、杉浦秀一留学生センター長の乾杯で、懇談会は盛況のうちに終了しました。

（国際本部国際教務課）



ロシア連邦総領事館アタッシェ
ベレズニャツカヤ氏



入学生代表 グエンさん



卒業生代表 コウさん

留学生センター日本語研修コース修了式（2014年10月入学者）



全員での記念写真



修了証書を受け取る学生

留学生センター日本語研修コース研修生の修了式を2月16日（月）午後2時より国際本部で行いました。

この研修コースは、主に大使館推薦の国費外国人留学生のうち、修了後に本学大学院又は道内の他大学大学院に進む研究留学生や、本学工学部に入学する日韓共同理工学部留学生、及び平成27年4月から新たに創設される現代日本学プログラム課程進学前の留学生等に日本語予備教育を行うためのもので、留学生センターにおいて6ヶ月

間開設されています。

今回修了式を迎えたのは、国費外国人留学生2名と日韓共同理工学部留学生6名、4月から現代日本学プログラム課程に進学予定の16名に加え、学内公募により、本コースを集中日本語コースとして受講した8名の計32名です。

修了式では、来賓の方々や教員が見守る中、日本語研修コース研修生には修了証書及び証明書が、集中日本語コース受講者には履修証明書が、上田

一郎国際本部長より一人ひとりに授与されました。引き続き杉浦秀一留学生センター長から、祝辞と今後の飛躍を祈念する激励の言葉が述べられ、修了者は真剣な面持ちで聞き入っていました。

最後に記念写真を撮影して式は終了しましたが、その後もしばらく、お世話になった日本語教員や留学生同士で写真撮影や懇談が続いていました。

（国際本部国際教務課）

現代日本学プログラム課程創設記念講演会を開催

平成27年4月から正規課程を開始する外国人留学生を対象とした学位プログラムである現代日本学プログラム課程の創設を記念して、「東北の復興～現在のプロジェクト、挑戦、そして展望～」と題した講演会を全4回にわたり開催しました。本講演会はスザネ・クリーン国際本部留学生センター准教授を中心に、様々な分野で復興支援に関わる方々からご講演いただきました。

特に最終回の第4回目は、ブルース・ミラー駐日オーストラリア大使を招いて「オーストラリアと日本～ケーススタディに見る二国間関係の未来～」と題し、東日本大震災直後に行った直接的取り組みからパブリックパートナーシップとしてのサポートへと変わった

経緯などについて講演していただきました。

また、講演会の前には、海外留学に興味を持つ日本人学生とオーストラリア留学生との座談会を設け、ミラー大使に留学経験の大切さなどについて学生と積極的に意見交換をしていただきました。

全講演にわたり、現代日本学プログ

ラム課程第1期生をはじめ、数多くの学生らが参加し、現代日本の生の声を知る大変意義深い機会となりました。

(国際本部国際教務課)



株式会社電通レイザーフィッシュ 飯田氏



株式会社石巻工房代表 千葉氏



IDRO-JAPAN代表 マンゴールド氏



駐日オーストラリア大使 ミラー氏



ミラー大使と座談会参加メンバー

各回のゲストと講演題目

第1回 1月20日(火)

株式会社電通レイザーフィッシュ 飯田 昭雄氏

「3.11以後に生まれた働き方2.0」

明治学院大学 トム・ギル教授

「福島・ふるさと：原発事故以降の地域コミュニティーについて」

第2回 1月27日(火)

株式会社石巻工房代表 千葉 隆博氏

「石巻工房：常識に囚われず、楽しむ」

ハーマンミラージャパン株式会社代表取締役 松崎 勉氏

「震災後に生まれた先駆的ビジネス」

第3回 2月3日(火)

上智大学 デイヴィッド・スレイター教授

「東北でのサービスラーニングについて」

東京大学大学院 弾塚 晴香氏

「福島で暮らす母親：厳しい現実について」

国際災害支援機構日本 (IDRO-JAPAN) 代表 ロバート・マンゴールド氏

「IDRO-JAPANとしての使命とチャレンジ」

第4回 2月5日(木)

駐日オーストラリア大使 ブルース・ミラー氏

「オーストラリアと日本～ケーススタディにみる二国間関係の未来～」

平成26年北大ペンハロー賞授与式を挙行



授与式での記念写真

2月20日（金）、情報教育館3階スタジオ型多目的中講義室において、平成26年北大ペンハロー賞の授与式を行い、新田孝彦理事・副学長から賞状の授与と記念品が贈呈されました。

北大ペンハロー賞は、平成17年度か

ら開始され、本学学生の課外活動の充実と更なる活性化を図るため、都道府県規模の競技会・コンクールで優勝するなど、高い評価を受けた学生団体等を表彰する制度です。

今回は、8団体、35個人が受賞しま

した。今回までで、121団体、317個人
の計438件に授与されています。

（学務部学生支援課）

平成26年度「北海道大学TF研修会」を開催

高等教育推進機構では、2月18日（水）に大講堂等を会場として、本学において初めてとなるTF（ティーチング・フェロー）研修会を開催しました。これは、平成27年度からTF制度が本学において導入されることに伴い、採用候補者である大学院生を対象として実施したものです。

TF制度は、大学院博士課程の学生を対象に、大学院教育の一環として、教員と分担しながら学士課程の授業を担う機会を与えることで、教育能力を高め将来指導的役割を果たす人材を養成することを目的とした制度です。学士課程教育をより一層充実させることも目的としています。また、TFに採用される学生には、本研修会などのTF研修の修了を義務づけ、事前に理解を深めてもらうこととしています。

午前の部では、新田孝彦高等教育推進機構長の挨拶に続き、「TFとして

の心構えと教育倫理綱領の理解」「シラバスの構成と意味」「評価の機能と種類」「クラス・マネージメント」といった、TFに関する具体的な内容の講演が行われました。

午後の部では、参加者は10名程度ずつのグループに分かれ、アクティブ・ラーニング実習を受講しました。各グループは、アイスブレイキングを行った後、「教育者または学習者としてのTFに求められるものは何か？」をテーマにグループ討議を行い、最後にその

成果を発表しました。

今回の研修会では、修士課程2年次及び博士課程の学生135名が修了しました。どの参加者も積極的に研修に取り組んでおり、TFに高い意欲を持って臨んでいる様子が感じられました。

今後は年2回TF研修会を開催することとしており、次回は8～9月に開催の予定です。

（高等教育推進機構）



午前の部の様子



実習に取り組む参加者

新渡戸スクール国際シンポジウム「大学院教育改革－専門性と+aをいかに学生に獲得させるか－」を開催



講演者及び新渡戸スクール関係者による記念写真

高等教育推進機構・新渡戸スクール設置準備委員会主催で、2月19日（木）に国際シンポジウム「大学院教育改革－専門性と+aをいかに学生に獲得させるか－（Reform of Graduate Education: How to Develop Students' Competencies and Their Specialties）」を、フロンティア応用科学研究棟の鈴木章ホールにおいて開催し、学内の教員、職員、学生、及び学外より98名が参加しました。

新渡戸スクールは、近年の「グローバル化」に象徴される社会の急激な変化に対応するため、本学大学院の全専攻に所属する学生を対象に、チームで問題を解決する能力を持ち、新たな社会的価値の創造に貢献するために必要な“+aの力”の育成を目指した新たな大学院特別教育プログラムです。このシンポジウムでは、新渡戸スクールを平成27年度に開校するにあたり、同スクールが果たす役割と意義を明確にするため、海外における大学院教育の動向と日本における大学院教育の方向性や社会的要請を踏まえた議論が交わされました。

開会挨拶では、山口佳三総長が本学の近未来戦略における新渡戸スクールのミッションと本学の大学院教育改革の方向性について述べるとともに、本学のみならず日本さらには世界の大学院教育改革についての議論が深まることに期待を寄せました。基調講演では、札幌農学校教頭のクラーク博士が学長を務めたマサチューセッツ農科大

学を前身とする、マサチューセッツ大学アマースト校よりKatherine S. Newman学務担当副学長を、また、筑波大学より、中央教育審議会委員や博士課程リーディングプログラム審査委員を務めておられる金子元久教授をお招きし、米国及び日本における大学院教育の現状とあるべき姿について講演いただきました。招待講演では、文部科学省高等教育局高等教育企画課国際企画室の佐藤邦明専門官、日本経済団体連合会社会広報本部の長谷川知子副本部長、ボゴール農科大学のDahrul Syah研究科長、カセサート大学のSeksom Attamangkune農学部長をお招きし、各々の視点から大学院教育の役割と取り組むべき課題を語っていただきました。さらに、本学大学院教育改革担当副学長の山下正兼教授が、昨年11月に実施した新渡戸スクールの試行を撮影・編集した動画を交え、新渡戸スクールの紹介を行いました。

パネルディスカッションは、本学工学院副学院長の小林幸徳教授がモデレーターとなり、講演者に対する会場からの質問に答える形式で進められ、様々な環境で指導的・中核的な役割を担うことができる能力を備えた人材を育成するために必要な大学院教育についての議論が展開されました。

最後に、大学院教育改革の先鞭を果たすこととなる新渡戸スクールへの様々な期待に応えるべく、本学の新田孝彦理事・副学長は閉会挨拶の中で



山口総長による開会挨拶



Newman学務担当副学長による基調講演



金子筑波大学教授による基調講演



山下大学院教育改革担当副学長による新渡戸スクールの紹介



講演者によるパネルディスカッション

「新渡戸スクールの実施にあたっては、教員の意識改革をはじめ、様々な困難が予想されるが、本学としてはこれをテコに大学院教育全体の変革につなげていきたい」と意気込みを語りました。

(学務部学務企画課)

北大フロンティア基金

北大フロンティア基金は、本学の創基130年を機に、教育研究の一層の充実を図り、これまで以上に自主性・自立性を発揮して大学としての使命を果たすため、平成18年10月に創設しました。

募金目標額は50億円です。奨学金制度の充実や留学生への支援などの学生支援を中心に、研究支援、学部等支援など様々な事業を行っており、期限を付さない、息の長い募金活動することとしています。

皆様には基金の趣旨にご賛同いただき、ご協力をお願いします。

北大フロンティア基金情報	16,592件	2,966,549,960円
基金累計額（2月28日現在）	教職員の寄附率	33.9%（1,331件/3,921人）

2月のご寄附状況

法人等2社、個人51名の方々から3,866,000円のご寄附を賜りました。

そのご厚志に対しまして感謝を申し上げますとともに、同意をいただいているの方々のご芳名、総合博物館への銘板の掲示について掲載させていただきます。（五十音別・敬称略）

寄附者ご芳名（法人等）

北海道大学生協同組合、北海道帝国大学医学部22期一同

寄附者ご芳名（個人）

合川 正幸	浅野 賢二	伊藤喜久恵	入澤 秀次	小内 透	小原 大和	埴山 雅秀	金川 眞行
河本 充司	小飼 宏男	齋藤 彰	斉藤 久	桜井 謙介	三升畑元基	清水 智之	鈴木 英昭
須田 孝徳	瀬名波栄潤	高橋 光彦	高橋裕美子	土家 琢磨	角田 隆	寺澤 睦	豊田 威信
長尾 敬志	永島 哲郎	三田村好矩	山内 隆嗣	山崎 賢司	吉田 広志		

銘板の掲示（20万円以上のご寄附）

（法人等）

北海道帝国大学医学部22期一同

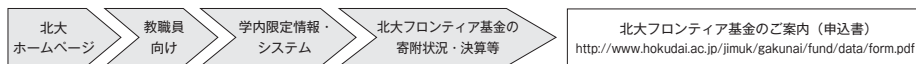
（個人）

高橋 光彦

ご寄附のお申し込み方法

①給与からの引き落とし

申込書は、本学ホームページの「学内限定情報・システム」からダウンロードし、ご記入の上基金事務室に提出してください。



②郵便局または銀行への振り込み

基金事務室にご連絡ください。払込取扱票をお渡します。

③現金でのご寄附

寄附申込書に現金を添えて、事務局財務部経理課収入担当にご持参ください。申込書は、本学ホームページから上記①の要領でダウンロードしてご記入いただくか、各部局事務担当及び事務局財務部経理課収入担当にご用意していますので、ご利用ください。

北大フロンティア基金に関する問い合わせ 基金事務室（事務局・学内電話 2017）

（総務企画部広報課）

COI-T「食と健康の達人」拠点がCOI拠点へ昇格

本学は、文部科学省「革新的イノベーション創出プログラム（COI STREAM）」に基づいて、独立行政法人科学技術振興機構（JST）が実施する「センターオブイノベーション（COI）プログラム」にCOI-T（トライアル）として採択されており、筑波大学及び食、健康、情報分野の33の企業・機関とともに「食・運動・健康・医療をつなぐ知で家庭に拓く次世代健康生活創造」に向けた産学連携研究を進めてきました。その成果が認められ、2月12日（木）に本学を中核とするCOI-Tプログラムは、正式なCOI拠点へと昇格することが決定しました。

COI「食・運動・健康・医療をつなぐ知で家庭に拓く次世代健康生活創造の国際拠点」（「食と健康の達人」拠点）では、COI STREAMのビジョン1「少子高齢化先進国としての持続性確保」を目標に、「健康創造拠点を『病院』から『家庭』へ」「健康創造方法を『治療』から『健康増進』へ」「健康情報の管理活用を『医療機関・分散管理』から『個人・一元管理活用』へ」と移すパラダイムシフトを興し、食・運動・健康・医療のインテグレーションによる、“健康+元気”な社会の実現を目指します。

具体的には、「プレママから子育て

にはじまり高齢者まで、美味しい食と楽しい運動で“笑顔あふれる”社会”を目指した、健康に関する食機能の解明や科学的根拠に裏付けられた食品や運動プログラムの開発、簡便に健康をチェックできるしくみの開発などを通じて、個人の食・運動・健康・医療に関する情報を一元化し、個人が保有・活用できる情報・社会システムを構築します。

（フード&メディカルイノベーション推進本部）



主な研究内容

- 1) 食・運動・健康・医療を貫く情報／社会インフラシステムの構築と新産業の創出
個人が食・運動・健康・医療データを活用でき、双方向でのコミュニケーションを実現する基盤システムを構築します。また、本計画で扱う大量の情報を統合し、活用する手法のプロトタイプを作成します。さらに、脂質代謝異常の早期発見、健康状態を知るための「健康ものさし」の構築など、特に重要なコア技術の開発、実証、評価、企業と一丸となったビジネスモデルの高度化を図ります。
- 2) 病気の前駆状態を早期発見・回復させる次世代型健康獲得技術とプログラム開発
食・運動・健康・医療の連携による病気の早期発見・予防・回復させるためのコア技術・プログラム・支援システムのプロトタイプを開発し、フィールド実証を行います。
- 3) 家庭への早期復帰を実現する、患者にやさしい医療技術とシステムの開発
家庭への早期復帰を実現する、患者にやさしい医療技術とシステムの開発を目指す上で必要な、診断治療プロセスの可視化モデルを作成します。

第6回COI-Tプログラム「『食と健康の達人』拠点」参画機関会議を開催

1月15日（木）・16日（金）、岩見沢市において、第6回COI-Tプログラム「『食と健康の達人』拠点」参画機関会議を開催しました。

今回の会議では、川端和重理事・副学長による開会の挨拶に始まり、吉野正則プロジェクトリーダー（産学連携本部客員教授、株式会社日立製作所

中央研究所 シニアプロジェクトマネージャー）より「岩見沢市との取り組み」の説明がありました。また、16日（金）には岩見沢市で進めている関連施設（ツルハドラッグストア遠隔健康相談等）の視察を行いました。実際に遠隔健康相談を体験し、参加者からは多くの意見や質問が寄せられました。

当日は、参画機関・企業、参画検討企業の他、松野 哲岩見沢市長にもご参加いただき、大盛況のうちに終了しました。

（フード&メディカルイノベーション推進本部）



遠隔健康相談の様子



ツルハドラッグストア内の遠隔健康相談ブース

COI-Tワークショップ in 岩見沢を開催

2月20日(金)に「COI-Tワークショップ in 岩見沢」を開催しました。

このワークショップでは、平野 治先生(株式会社H2O総合研究所)がファシリテーターとなり、岩見沢市で働いている保健師・管理栄養士等の方々に、「岩見沢市の『健康、地域コ

ミュニティ』の現状、課題、今後のアクションプラン」を題材としたシナリオライティングを体験していただきました。子育て世代、高齢者、障害者を対象とした様々なプランが発表され、非常に熱のこもった活発な議論が交わされました。

終わりに、本会議・本ワークショップ開催に当たり、ご支援・ご協力いただきました皆様に改めてお礼申し上げます。

(フード&メディカルイノベーション推進本部)



シナリオライティングの様子



ディスカッションの様子

平成26年度「ふるさと北海道応援フォーラム」に参加

2月13日(金)、ホテルメトロポリタン エドモント(東京都千代田区)にて「ふるさと北海道応援フォーラム」が初めて開催されました。(主催:北海道、北海道企業誘致推進会議、後援:北海道経済連合会、公益社団法人北海道倶楽部、株式会社北洋銀行、株式会社北海道銀行、株式会社北陸銀行、北海道大学、協力:北海道大学連合同窓会、協賛:サッポロビール株式会社、ポッカサッポロ北海道株式会社)

本フォーラムは、道外で活躍されている北海道出身の企業関係者や道内大学出身者等、北海道にゆかりのある方々を対象に、北海道の「今」をお伝えし、ふるさと北海道を懐かしんでいただくとともに、ビジネスフィールド

としての北海道の魅力をお伝えすることを目的としています。

本フォーラムは2部構成となっており、第1部では各機関がプレゼンテーションを行いました。まず、「本道ゆかりの企業様からのプレゼン」としてJFEエンジニアリング株式会社相談役の岸本純幸氏と株式会社山口油屋福太郎代表取締役社長の山口 毅氏が、次に「市町村からのふるさと応援プレゼン」として美唄市長の高橋幹夫氏と釧路市長の蝦名大也氏がプレゼンテーションを行いました。また、「大学からのふるさと応援プレゼン」として「北海道大学の『今』と産学連携の取組」をテーマに本学産学連携本部副本部長の山本 強教授が発表しました。

第2部は交流会で、会場内には本学の他、自治体などのブース展示があり、参加者が食事を楽しみながらの懇談となりました。

参加者は250名にもものぼり、本学のブースにも多くの本学OBや企業関係者に訪問いただき、活発な意見交換や情報交換で盛り上がりました。北海道への企業誘致にますます拍車がかかるものと期待しています。

最後に、本フォーラム開催に際してご支援いただきました各機関様にお礼申し上げます。今後ともご指導ご支援を賜りますよう、よろしく願いいたします。

(産学連携本部)



会場の様子



山本教授のプレゼン



本学のブース展示

第12回 創成シンポジウム「感染症研究の最前線 —エボラ・結核を例に—」を開催



集合写真

創成研究機構では、2月24日(火)、学術交流会館講堂において、第12回創成シンポジウム「感染症研究の最前線—エボラ・結核を例に—」を開催しました。

今回のシンポジウムは、近年、危機意識が高まっている感染症をテーマとし、エボラ出血熱や結核などを事例に、人獣共通感染症リサーチセンターの高田礼人教授による「エボラウイルスに迫る」、鈴木定彦教授による「結核 今そこにある危機」と題した講演

が行われ、ウイルスや細菌が増殖・感染する仕組み、治療法の開発状況、世界での様々な対応策などについて話がありました。また、異分野の研究者という立場から、工学研究院の矢久保孝介教授による「ネットワーク科学から見た感染症の流行と防疫」と題した講演が行われ、物理的な視点からみた感染経路などについて解説がありました。

講演の後は、フリーアナウンサーの真砂徳子氏がモデレーターとなり、講演者たちをパネリストとしてパネル

ディスカッションが行われました。市民レベルでの感染症対策や、身近な感染経路の例など、参加者から寄せられた率直な質問への回答を交えながら進められ、会場は一体感に包まれました。

当日は一般市民を中心に125名の参加者があり、時間が足りなくなるほど質問も活発に出るなど、大変盛況となりました。

(創成研究機構)



川端和重機構長による挨拶



高田教授による講演



鈴木教授による講演



矢久保教授による講演



パネルディスカッションの様子



会場の様子

■ 部局ニュース

駐日オーストラリア大使御一行が 農学院・農学研究院・農学部を訪問

2月6日（金）、ブルース・ミラー駐日オーストラリア大使御一行が農学研究院を訪問されました。前半、丸谷知己農学研究院長が農学院・農学研究院・農学部についての概要、新しく設置の準備を進めている「国際食資源学院」の意義や体制などを説明しました。

後半では、農学研究院ビークルロボティクス研究室の野口 伸教授及び岡本博史准教授がロボット農業の研究に

ついて説明し、同研究に係る日本とオーストラリアの合同プロジェクトについて意見交換を行いました。

日本とオーストラリアの両政府は、平成26年度に準天頂衛星を利用したロボット農業実証の合同プロジェクトを実施しました。このプロジェクトにビークルロボティクス研究室がロボットトラクタの開発チームとして参画し、平成26年11月と平成27年1月には、オー

ストラリア・ニューサウスウェールズ州 Jerilderieの農場にて実証試験を行っています。

オーストラリア大使御一行からは、国際食資源学院の構想やビークルロボティクス研究室のロボット農業研究に対して強い関心を持っていただき、活発かつ有意義な意見交換となりました。

（農学院・農学研究院・農学部）



駐日オーストラリア大使 ミラー氏



（左から）オーストラリア領事イアン・プレジア氏、ミラー大使、二等書記官伊モジン・エバンス氏



大使御一行に説明をする丸谷農学研究院長（左側奥から2人目）



岡本准教授（左）と野口教授

農学院・農学研究院・農学部で北海道建設部と 砂防分野において連携・協力に関する覚書を締結

農学院・農学研究院・農学部は、2月13日（金）に北海道建設部と砂防分野における連携・協力に関する覚書を締結しました。

今後、流域砂防学研究室と国土保全学研究室が中心となり、砂防技術の向上や人材育成に資する調査・検討・研

究・啓発活動等を通じて、自然災害から道民の生命・財産の保全、流域の自然環境の保全を協力して進め、持続的な北海道の発展に寄与することを目指していきます。

（農学院・農学研究院・農学部）



握手を交わす丸谷知己農学研究院長（左）と下出育生建設部長（右）

教育学研究院・公州大学校師範大学10周年記念 ジョイントシンポ2014を開催



参加者の集合写真



小内 透研究院長の挨拶

教育学研究院は、2月16日（月）・17日（火）に韓国・公州大学校師範大学とのジョイントシンポジウムを開催しました。このシンポジウムは、社会的排除問題と教育学研究の課題に焦点を合わせてこれまで開催してきました。今回は10周年にあたることから、日韓双方の共通関心事となっている「持続可能なグローバルな地域づくり」を総括的な共通論題として設定し、東アジア地域における今後の教育学研究の課題を探究することとしました。

2日間にわたり「持続可能なグロー-

バルな地域づくりと教育学研究の課題」「人口縮小社会における生涯学習・学校教育の役割と課題」「日韓の教育学研究の多様性と課題」の3つのセッションが設けられ、両日で29人（延べ56人）の参加者により有意義な討論が行われました。

グローバル化は急速な格差の拡大を伴いつつ進行していますが、それは同時に、教育領域を含めた従来の制度の限界性をも明らかにしています。そのような状況に対応して、日韓両国ではともに教育・福祉・保健等に

関わる新たな取り組みが展開していることが紹介され、その比較を通じて持続可能な地域づくりのための教育学研究の課題が確認されました。

さらにこの討議を踏まえて、今後の国際交流についても意見交換が行われ、大学院生をも含めた国際的な共同研究・協同教育の展開に向けて双方で努力することが確認されました。

（教育学院・教育学研究院・教育学部）

環境健康科学研究教育センターでマレーシア科学大学との 学術交流を実施

環境健康科学研究教育センターは、大学間交流協定事業として、マレーシア科学大学から、Hamid Jan B. Jan Mohammed教授とLoy See Ling博士を招へいし、3月2日（月）～5日（木）まで4日間、学術交流を実施しました。

当センターでは環境と子どもの健康に関する北海道スタディを進めています。これは、胎児期から学童期までの環境要因が子どもの健康に及ぼす影響を調べる疫学研究です。平成23年には当センターと類似の研究をしている韓国、台湾の研究グループによりBirth Cohort Consortium of Asia (BiCCA) を設立し、研究協力や連携を図っています。BiCCAには現在9か国20の研究グループが参画していますが、Hamid Jan教授、Loy博士はマレーシア科学大学で研究を行っており、BiCCAにも参画していることから今回の招へいに至りました。

オープンセミナーでは、マレーシア

科学大学の紹介と研究の概要についてHamid Jan教授が、研究成果の一部をLoy博士が講演しました。2日目、3日目の研究会議では、Hamid Jan教授から妊娠中の母体血中や母乳のアディポネクチン、レプチン、ビタミンDと出生時の発育との関連について、Loy博士から妊娠中の酸化ストレスと出産後の肥満について詳しい報告がありました。当センターからは北海道スタディ研究の概要と得られた成果を宮下ちひろ特任講師ほか5名が報告し、互いの研究について理解を深めました。続く自由討論では、それぞれの将来的な研究案について共同研究の可能性など活発に意見が交わされました。その後、Hamid Jan教授とLoy博士が保健科学研究院の齋藤 健教授（センター長）、山内太郎教授（センター兼務教員）、千葉仁志教授を訪問し、交流を深めました。

最終日には札幌エルプラザで市民講

演会「子どもの健康と栄養」を開催しました。Hamid Jan教授とLoy博士からは、ビタミンD摂取の重要性や受動喫煙による子どもの健康影響について、わかりやすく講演いただきました。当センターの湊屋街子特任助教からは北海道スタディと環境省エコチル調査の成果を一部報告しました。講演会には調査参加者や一般市民など約20人が参加し、「家族の健康のために今日の話を取り入れたい」「研究調査について日本内外のものを聞けるのを楽しみにしている」などの声が寄せられました。

今回、栄養学分野の研究者を初めて招へいし、子どもの健康と環境に関する研究に異なる視点からの研究動向を得るとともに、マレーシア科学大学と当センターとの共同研究の可能性を探り、大変有意義な学術交流となりました。

（環境健康科学研究教育センター）



Hamid Jan教授とLoy博士を囲んで



市民講演会にて講演するHamid Jan教授



市民講演会にて講演するLoy博士

薬学研究院で国際シンポジウム

“Understanding and care of neurodegenerative diseases” を開催

1月6日(火)、薬学部臨床薬学講義室において、北海道大学Universal Campus Initiative (HUCI) 支援トップコラボ事業による国際シンポジウム“Understanding and care of neurodegenerative diseases (神経変性疾患の理解と治療)”を開催しました。講師として、アルツハイマー病の著名な研究者であり、2010年の“Western Australia’s Australian of the Year”を受章した、オーストラリアEdith Cowan UniversityのRalph Martins

教授を招へいしました。

シンポジウムでは、Martins教授の他、University of Western Australiaから1名、本学から4名の研究者の講演が行われ、新年早々の開催にも関わらず、生命科学院・先端生命科学研究院、薬学研究院・薬学部から多数の教員、学生が参加し、活発な議論が行われました。

(薬学研究院・薬学部)



Martins教授を囲んで記念撮影

薬学研究院で合同シンポジウム「創薬に関わるインフォマティクスの潮流—基礎、臨床、ビジネスまで—」を開催

2月2日(月)、薬学部臨床薬学講義室において、薬学研究院創薬科学研究教育センター、情報基盤センター、未来創薬・医療イノベーション拠点形成の3部局等合同によるシンポジウムを開催しました。

本シンポジウムは、創薬科学研究教育センターが主催するシリーズシンポジウムで、「第4回北海道大学創薬センターシンポジウム」「平成26年度北海道大学情報基盤センター共同研究セミナー」「第27回未来創薬・医療イノベーションセミナー」を合わせたものです。開会にあたり、創薬科学研究教育センター長の前仲勝実教授から同センターの現状報告、情報基盤センターの棟朝雅晴教授から同センターの紹介が行われました。

シンポジウムは4名の講師を迎えて開催しました。独立行政法人産業技術総合研究所創薬分子プロファイリングセンターの福西快文先生からは「myPrestoを用いたin-silico screeningの実際と将来展望」と題して、in-silico screening*による化合物の的中精度や、Multiple target Screening (MTS) 法などの実際の方法論について、現在のin-silico screeningにおける問題点の提起、今後のin-silico screening技術進歩の

方向性を専門家だけでなくコンピュータシミュレーションに馴染みの少ない研究者や学生にも理解できる詳細で非常にためになる講演をいただきました。

医学研究科の伊藤陽一准教授からは「治療に役立つ遺伝子診断の開発とバリデーションの方法論」と題して、分子標的薬やコンパニオン診断薬への展開を期待させる遺伝子診断や、予後予測モデルについて講演がありました。

東京工業大学大学院イノベーションマネジメント研究科の仙石慎太郎准教授からは「創薬研究開発モデルの変革と産学公連携」と題して、創薬ビジネス並びに経営の観点から見たアカデミア創薬について講演いただき、投資家の観点から見たアカデミア創薬への期待度及び投資リスク、ベンチャー企業の設立と設立後の展開などについての実例紹介や、アカデミア創薬の着地点を見据えた研究の重要性をお話いただきました。

最後に、創薬科学研究教育センター／創成研究機構の兄玉耕太特任准教授から「創薬科学研究教育センターにおける計算と実験の融合～アカデミア創薬における商業的医薬品開発～」と題して、in-silico screeningの結果と実際のスクリーニングの結果を示すことで、

創薬科学研究教育センターにおけるスクリーニングの実情がより詳しく報告されました。

シンポジウムの参加者は50名を超え、創薬開発に向けた基礎から臨床とビジネスに至る全体の流れに対する意識の高さがうかがえました。

また、シンポジウム終了後の意見交換会でも、活発な討論が行われ、最新の計算科学技術やビジネスのノウハウについて多くの意見交換がなされるなど、大変貴重な場となりました。

*in-silico screening

コンピュータ上で多数の化合物と目的タンパク質の構造情報に基づいた結合シミュレーション実験を行い、物理化学的相互作用エネルギーを評価する。数十万種類の化合物のシミュレーションが可能であり、評価に応じた化合物の順位付けを行うことで結合候補化合物を選定する方法。

(薬学研究院・薬学部)



講演の様子

先端生命科学研究院でFDSD研修会「総会2014」を開催

先端生命科学研究院では、2月16日（月）に理学部5号館大講堂にて平成26年度FDSD研修会「総会2014」を開催しました。今年度も教育・研究担当の全教員（特任，客員を含む）及び研究室の事務・技術職員を対象とし、同研究院の諸研究・教育活動報告とともに理学・生命科学事務部の業務報告も実施しました。教員及び職員の出席者総数は69名でした。

プログラム第1部では学生のメンタルヘルスに関わる「学生の自殺予防対策」について、保健センターの武田弘子先生による講演がありました。国内、本学のデータ、大学生のリスク因子の他、教職員の心理的余裕が、より快適な研究環境や修学環境を作ることなど、保健センター精神衛生相談の受診についての紹介がありました。

第2部では、出村 誠研究院長から本学のミッションの再定義、北海道大学近未来戦略150，スーパーグローバル大学創成支援事業の方向性の概説とともに、先端生命科学研究院の研究推進，教育改革，研究・教育の環境改善や支援への取り組みの概要説明がありました。大学院教育では生命科学の3つのポリシー（入学・教育課程・学位授与）に準拠した教育改革の方向性とPBL/アクティブラーニング実践のための講座・FD研修が紹介されました。学部教育では、理学部で先行実施している4学期制4年目の評価，TA/TF制度の活用など重要性が説明されました。また生命科学（生命融合科学コース）・理学部生物科学科（高分子機能学）で利用しているICT学修支援システム「双方向授業支援シ

ステム，eポートフォリオ，TA研修eラーニング」がバイリンガル化され，全学活用される計画についても紹介がありました。

第3部では，理学・生命科学事務部の主要担当ごとに若手代表による活動報告がありました。教員からも質疑応答があり，普段聞けない事務管理の難しさを知る良い機会となりました。研修会終了後には先端生命科学研究院と理学・生命科学事務部の意見交換会も行われ，今後の大学教育・研究環境の改善に教員と事務職員との協働が欠かせないという意識を更に深めることができました。

◆開催概要（ホームページ新着情報）
<http://altair.sci.hokudai.ac.jp/advlfsci/>

（生命科学・先端生命科学研究院）



会場の様子



保健センター 武田先生による講演



出村研究院長による説明



若手事務職員による報告

生命科学院・先端生命科学研究院等で PBL実践のためのファシリテーター養成講座を開催

2月7日(土)、21日(土)、28日(土)の3日間にわたり、「PBL実践のためのファシリテーター養成講座 Learning Facilitation ～PBLで進めるワークショップ型授業の理論と実践～」(主催：生命科学院・先端生命科学研究院、理学研究院、創成研究機構URAステーション)を開催し、15部局32名(うち博士課程学生4名)が参加しました。

この講座ではPBL(Project Based Learning: 議題解決型学習)に代表されるアクティブラーニングで進めるワークショップ型授業を、大学授業で円滑・効果的に進めるためのファシリテーションスキル、ワークショップの組み立て(インストラクショナルデザイン)と評価項目の設計方法(KGI: 重要目標達成指標, KPI: 重要業績評価指標)を講義とワークショップ形式で、3日間18時間のチーム学習で学び合いました。最終的に、本学で実施する15のPBL型授業のシラバスモデルの発表会を行いました。

講師を務めていただいた長尾 彰氏(Educational Future Center)は学校教育や企業経営・地域のチームビルディング、ファシリテーションの専門家です。講座の中では、講師の巧みなファシリテーション(支援・促進)によって、初対面グループが徐々にチームへ成長する「組織の発達段階」や、気づきを促す支援などを実体験することができました。実際の授業デザインでは、座学とアクティブラーニングを組み合わせる、TA/TF補助を活用するなど、目的に応じて多様なやり方があることもわかりました。参加者からは、「今回の3回の講座は今まで参加したFDの中でも最高の講座でした」との感想がありました。

各学部・学科・大学院専攻ではアドミッション、カリキュラム、ディプロマに係る3つのポリシーを公開しています。この教育方針を達成するには、専門知識を深化させる教授法に加えて、学生の主体的学習・参加意欲を伸ばすワークショップ型授業で専門知識

を広い視野で社会と結びつける共同学習や学習到達の管理などが役立つと考えられます。しかしワークショップ型授業をファシリテーションできる教員は現在のところ多いとは言えません。社会が求める高度人材養成のあり方を再認識し、ファシリテーター養成の教員FDを持続的に進めていくことも必要です。

各部局のPBL型授業の現状、ワークショップ専用教室の新設、アクティブラーニング推進室活動、さらには新渡戸スクールでアクティブラーニングを中心とする大学院共通授業科目が開講されることなど、今回の参加者同士が情報交換できたことも有意義な時間となりました。この参加者コミュニティが部局を超えたファシリテーターネットワークへと発展していくことを期待しています。

(生命科学院・先端生命科学研究院)



チームで話し合う参加者の様子



PBL型授業のシラバスをまとめる作業等の様子

文学研究科で大学院生が総合博物館「産学連携」展示を制作

文学研究科開講の展示制作プロセスを学ぶ演習（「北方人類学特別演習」・「人類学特別演習」：担当教員 佐々木亨教授）では、文部科学省研究大学強化促進事業の一環として、総合博物館の監修のもと、平成25年度から本学における産学連携による研究成果を紹介する展示を総合博物館で制作してきました。

平成25年度は工学研究院の長谷川靖哉教授がセントラルテクノ株式会社（大阪市）と開発している、紫外線を当てると発光する物質である「カメレオン発光体と赤色強発光体」展示を、平成26年度は同研究院の永田晴紀教授が株式会社植松電機（赤平市）と共同で開発している「CAMUI（カムイ：Cascaded Multistage Impinging-jet）ロケット」展示を完成させました。

「カメレオン発光体と赤色強発光体」展示は当初、博物館1階「科学技術」コーナーで公開していましたが、平成26年9月に博物館2階「産学連携」コーナーに移動しました。この1月から公開した「CAMUIロケット」展示とともに、本学における産学連携による最新の研究成果の一端がわかる展示コーナーとなっています。

「カメレオン発光体」は、一つの物質でありながら温度によって緑、黄、オレンジ、赤と様々な色を発する世界で初めて開発された物質であり、「赤色強発光体」は、世界最高の発光強度

と発光効率を持ち、どちらも世界最先端の研究成果であると言えます。展示は、見学者が実際に手を触れ、操作することによってその美しさに感動していただけるようハンズオンの要素を取り入れました。発光のしくみや長谷川教授の化学に対する姿勢、社会にどのように役立つかが具体的にわかるように構成されています。

「CAMUIロケット」は、燃料にプラスチック、酸化剤に液体酸素を使用し、火薬や爆発物などの危険物は使用していないので、安全管理の設備を省略することができます。そのため、打ち上げのための射場関連の費用も減額することができます。将来的には一般的な実験装置として、研究者が手軽に利用できるようになることが期待されています。展示は、これまでのCAMUIロケット開発の変遷がわかるロケット4機と燃料ブロック、過去に失敗した打ち上げ時の残骸などの実物資料で構成しました。パネルやインタビュー映像で

は、燃料と酸化剤の仕組み、開発の歴史、永田教授と株式会社植松電機専務の植松 努氏のこのロケットに対する熱い思いを伝えています。

どちらの展示も非常に短い期間での制作でしたが、演習を受講している大学院生たちは、両教授及び共同開発している両企業のご支援・ご協力のもと、精力的に作業を進めました。皆様方に、ぜひ見ていただきたいと思っています。

なお、展示制作に際し、産学連携本部関係者の皆様に、多大なるご尽力をいただきました。あらためて感謝申し上げます。

（文学研究科・文学部）

*総合博物館は耐震改修工事のため、平成27年4月から平成28年7月頃まで休館となります。その後、「産学連携」コーナーは再び公開される予定です。



2種類の発光体を開発した長谷川教授



CAMUIロケットを開発している永田教授（左から4人目）と展示制作メンバー

総合博物館で「卒論ポスター発表会」を開催

総合博物館では平成20年度より「ミュージアムマイスター認定コース」を設定し、この認定コースの社会体験型科目の一環として同年より「卒論ポスター発表会」を開催しています。卒業を控えた学部生が、4年間で学んだことや研究した成果をA0サイズ1枚のポスターにまとめ、発表します。卒業研究を市民の方々や他分野の学生にわかりやすく発表し、質問に答えることによって、コミュニケーション能力の向上を図ることを目的としています。

平成26年度は、2月28日（土）・3月1日（日）に、総合博物館1階「知の交流」コーナーで開催しました。ポスターとホームページでの公募により、文学部から1名、水産学部から1名、理学部から2名、農学部から4名、工学部から4名の計12名が参加しました。

発表者は、1枚のポスターを完成させるまでに総合博物館の担当教員の指導を受け、何度もミーティングを行い、意見交換し、改訂を繰り返しました。また、様々なプロフィールをもった来場者を想定し、説明のリハーサルを重ねて準備しました。

ポスター展示は2日間行い、多くの方にご来場いただき、発表者は来場者と生き生きと楽しく対話していました。2日目にはプレゼンタイムを設け、発表者が5分ずつ、それぞれのポスターの内容や見所などを紹介しました。最後に、2日間の来場者の投票による「来館者賞」と、市民3名、本学教職員6名から成る審査員の投票による「優秀コミュニケーション賞」「優秀デザイン賞」「最優秀賞」を決定しました。その結果、「来館者賞」は水産学部の白井孝信さんと文学部の藤岡奈緒美さんが、「優秀デザイン賞」は理学部の太田 晶さんが、「最優秀賞」及び「優秀コミュニケーション賞」は農学部の中村俊介さんがそれぞれ受賞し、表彰式と講評会を行いました。

来場された市民の方々には、北大生がどのようなことを学び研究しているのかを知っていただき、教員や学生にとっては他学部の研究成果を知る良い機会となりました。また、発表した学生達にとってはコミュニケーション能力を身に付ける機会になっただけでなく、卒業研究を見直し、他の学部・研究室の研究を知る機会となり、普段の

学生生活では味わうことのできない大学博物館という場での貴重な経験を積むこととなりました。

また、発表会の運営は、「ミュージアムマイスター認定コース」の社会体験型科目の一環として学生4名が博物館の冬景色をデザインしたポスターやプログラム冊子の制作、会場設営、当日の受付、プレゼンタイムと表彰式・講評会の司会進行を担当しました。会場には北大カフェプロジェクトによるカフェが開設され、和やかな対話を楽しむ場が生まれました。彼らは会場運営に協力しただけでなく、発表者のミーティングにも参加し、来場者の立場からポスター制作についてアドバイスを続けました。

卒論ポスター発表会は来年度も引き続き開催する予定ですので、ご協力のほどよろしく申し上げます。準備のプロセスや当日の様子、発表者と運営担当学生的事後考察レポートは当館ホームページで公開しています。

◆<http://www.museum.hokudai.ac.jp/>

(総合博物館)



ポスターの前で説明する学生



表彰式の様子

附属図書館で北海道地区機関リポジトリ実務担当者研修 「出版社の著作権ポリシーを読む」を開催

附属図書館では、1月30日（金）、北海道地区機関リポジトリ実務担当者研修「出版社の著作権ポリシーを読む」を開催しました。

本学の北海道大学学術成果コレクション（HUSCAP）をはじめとして、大学等研究機関では機関リポジトリを運用しています。研究論文を機関リポジトリで公開する際には、論文の出版社のセルフアーカイブに関する方針（著作権ポリシー）に留意する必要があります。今回の研修では道内大学職員及び本学図書館職員24人が参加し、セルフアーカイブと著作権の関係、海

外出版社の著作権ポリシーについて学びました。

研修では、はじめに附属図書館のHUSCAP担当者が著作権の基礎知識、特に、セルフアーカイブや博士論文に関する海外出版社の著作権ポリシーに関しての説明を行い、その後、参加者が実際に海外出版社のポリシーの読解を行いました。アンケートでは「著作権ポリシーの読み方のポイントがわかった」「今まで悩んでいた点を知ることができた」などの感想が寄せられました。

附属図書館では、今後もこのような

業務に関する知識を深める機会を持つことによって、より良い研究支援に努めていきたいと考えています。

（附属図書館）



講師の説明を熱心に聴く参加者

附属図書館で雪像展示とアイスキャンドル点灯

2月18日（水）に、附属図書館正面玄関脇で雪像展示とアイスキャンドルの点灯を行いました。

午後5時過ぎから、バケツや牛乳パックの水を凍らせて作製したアイスキャンドルに火が灯され、図書館の利用者や、道行く人たちの目を楽しませました。

雪像のモデルとなったのは、まるい形に目・くちばし・翼がついた「はすかっぷちゃん」で、北海道大学学術成

果コレクション（HUSCAP*）のキャラクターです。

HUSCAPは運用を開始してから今年で10年を迎えます。今回の雪像は運用10周年を祝って、職員有志が一週間かけ、昼休みや終業後に作成しました。

◆HUSCAP

<http://eprints.lib.hokudai.ac.jp/>
HUSCAPで研究成果、著作を公開するには
<http://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/staff/index.jsp>

「博士論文のインターネット公表」ホットライン
http://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/thesis/hotline_ja.jsp

*HUSCAP

論文、会議発表スライド、教材、学位論文などの本学の学術成果を広く社会に公開するとともに、後世に継承することを目的とした、学術成果アーカイブ。

（附属図書館）



はすかっぷちゃん雪像とアイスキャンドル



雪像を囲む有志一同

低温科学研究所でスノーランタンによるライトアップを実施

2月27日（金）、スノーランタンを低温科学研究所玄関前から獣医学部付近までの間に飾りました。このスノーランタンは低温科学研究所の冬のイベントの一つとして、毎年大学院生有志により作成しています。

当日の日中はあいにくの雨天で実行

が危ぶまれましたが、夕方頃には天候も落ち着き、無事実施することができました。ロウソクによる手作りの光の光景は、いつもの街灯の照明とは異なる情緒を作りだし、周囲を幻想的に照らしていました。

スノーランタンは来年度も引き続き

実施していく予定です。低温科学研究所付近を通りかかる際には、一時足を止めていただき、光景をお楽しみいただければ幸いです。

（低温科学研究所）



低温科学研究所玄関前の様子



上から見た風景



作成したスノーランタン

レクリエーション

教職員サッカークラブが平成26年度 第27回札幌社会人フットサルリーグに出場

11月2日（日）～2月22日（日）の日程で、平成26年度 第27回札幌社会人フットサルリーグに出場しました。

最上位の1部から5部まで、全5部45チームで構成されるリーグ戦で、教職員サッカークラブは3部に所属し、4勝4敗の5位で全日程を終えました。対戦成績は以下のとおりです。

（教職員サッカークラブ）

11月2日	教職員サッカークラブ	3 - 2	ビアンカFC
11月2日	教職員サッカークラブ	3 - 6	Network+
11月24日	教職員サッカークラブ	2 - 6	アンクル
11月24日	教職員サッカークラブ	3 - 5	SaliveS
1月4日	教職員サッカークラブ	0 - 4	シュートンズ
1月4日	教職員サッカークラブ	4 - 2	ちば
2月22日	教職員サッカークラブ	3 - 1	FC.ヤマカシ
2月22日	教職員サッカークラブ	3 - 0	FC.ORVAL

■ 定年退職を迎えるにあたって

本年3月31日限りで定年退職される方々のお言葉と略歴を紹介します。

文学研究科教授

つまがり としろう
津曲 敏郎 氏



北大に入学した昭和45年は、全国を吹き荒れた学園紛争の余波で入学式もありませんでしたが、広いキャンパスと自由な校風のなか、のびのびと学生時代を過ごさせていただきました。良き師との出会いもあり、助手に採用していただいた教員としてのスタートを切りました。途中他大学への転出を経て、再び呼び戻していただき、以来定年の日まで恵まれた環境で研究教育に勤しむことができたのは、優れた先輩や同僚の先生方、献身的な事務の皆さん、そして優秀な学生諸君のお蔭にほかなりません。

定年前の4年間、思いがけずも総合博物館長を務めさせていただきました。開館15周年を経た昨年、累計100万人の来館者を達成するなど、大学博物館として全国的にも高い実績を上げているのは、もちろん歴代の館長や博物館教員・スタッフの努力の賜物ですが、その時期に館長として立ち会えたことを幸せに思います。博物館は耐震改修工事のため長期休館に入り、来年7月頃のリニューアル・オープンを目指していますが、今後大学博物館の役割はますます重要になるものと、新たに生まれ変わる博物館に期待しています。

定年退職後も特任教員として引き続き微力を注がせていただくつもりですが、北大のますますの発展を願ってやみません。

略 歴

生年月日 昭和26年11月30日
昭和49年4月 北海道大学文学部文学科卒業
昭和52年2月 北海道大学大学院文学研究科修士課程修了
昭和52年10月 北海道大学大学院文学研究科博士後期課程退学
昭和52年11月 北海道大学文学部助手
昭和63年4月 小樽商科大学商学部助教授
平成3年10月 小樽商科大学言語センター助教授
平成8年10月 小樽商科大学言語センター教授
平成10年4月 北海道大学文学部教授
平成12年4月 北海道大学大学院文学研究科教授
平成23年4月 } 北海道大学総合博物館長
平成27年3月 }

文学研究科教授

み き さとし
三木 聰 氏



1970年に北大に入学して以来、45年の歳月が過ぎました。博士後期課程に続く日本学術振興会の奨励研究員を終え、80年代の初めに私は1年半ほど、日中間の学術交流が再開されてさほど間もない中国に留学しました。当時の中国は、鄧小平時代（改革・開放政策）が始まってまだ2～3年しか経っておらず、今日の経済大国からは想像ができないような発展の揺籃期にあり、1年を過ごした福建省の厦門大学では、新築中の建物の前庭で石工が“自力更生”ばりに日がな一日、トンカチトンカチと石畳用の石塊を叩いていました。その後、文学部の助手を経て、1990年から12年間、高知大学で教鞭をとった後、2002年に再び北大の文学研究科に戻って13年が経ちました。私はもともと中国明清時代の社会経済史を研究してきましたが、北大に戻ってからは、新たに壬辰戦争期を中心とした明末政治史へと研究を拡げるとともに、また中国・台湾の主だった史料収蔵機関において伝統中国の裁判資料（判牘）の調査を思う存分に行うことができました。この13年間は、私にとって教育・研究のために十二分の時間を与えられた、本当に恵まれた期間であったと思っています。これもひとえに私が所属する文学研究科及び東洋史学研究室の同僚教員のお蔭であり、心から感謝を申し上げる次第です。

略 歴

生年月日 昭和26年10月26日
昭和49年3月 北海道大学文学部史学科卒業
昭和52年3月 北海道大学大学院文学研究科修士課程修了
昭和55年3月 北海道大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学
昭和58年8月 北海道大学文学部助手
平成2年4月 高知大学人文学部助教授
平成7年4月 高知大学人文学部教授
平成13年3月 博士（文学）（北海道大学）
平成14年4月 北海道大学大学院文学研究科教授

文学研究科教授

おの よしひこ
小野 芳彦 氏

日本語はとても面白い言語です。それを機械がわかるようにすることは、技術立国を自負する日本にとって、やりがいのあるテーマです。私は理系出身で情報科学の研究者としてスタートし、これを目標としてきました。しかし、言語は文系の素養もないと手に負えない存在です。現在の関心事は、言語、特に日本語を使う話者の心理や論理にどのような言語学的基本原理があるのかを明らかにすることで、成果が目に見える形になるのはまだまだ先でしょう。時代と共に科学の不思議が解明されつつある21世紀ですが、「人間」という大きな不思議は依然として残っています。思考・心理の仕組みを解き明かす糸口こそが言語であり、取り組みがいのある課題でもあります。退職の時期になってまだこんなことでは…と、お叱りを受けそうですが。

体育が苦手な数学と理科が得意科目だった私が、北海道大学の文学研究科で言語情報学を教育研究することになった背景には、何でも知りたいという好奇心があったように思います。理系的発想では、人類の「知」を普く（実際は全世界の機械が）共有することを目指すのですが、何でも知っているようになりたいという個人的で文系的で無謀な欲求が私の研究活動を支えていると感じています。また、前任機関や北海道大学の同僚・学生さんたちが、このような文理融合の環境を提供してくださっているおかげだと感謝しています。

略 歴

生 年 月 日 昭和26年 9月22日
昭和49年 3月 東京大学理学部物理学専攻卒業
昭和51年 3月 東京大学大学院理学系研究科物理学専攻修士課程修了
昭和53年 3月 東京大学大学院理学系研究科物理学専攻博士課程退学
昭和53年 4月 東京大学理学部助手
平成元年10月 国際日本文化研究センター研究部助教授
平成2年 6月 理学博士（東京大学）
平成8年 3月 北海道大学文学部教授
平成12年 4月 北海道大学大学院文学研究科教授

法学研究科教授

はやしだ せいめい
林田 清明 氏

キャンパスの四季春秋は印象深い。時計台の牧歌的な鐘の音が研究室まで聞こえる。北国の短い夏の終わりを告げるかのような打ち上げ花火の音、枝に白い雪を被ったニレの林の凍てつく冬、萌え出る若葉の頃の浮き立つような気分、などが思い出される。

北大方式といわれた教養部改革さらには日本型法科大学院などの開設もあり、多忙を極めることになった。その中で、若い様々な学生諸君、著名な先達や同僚たちとの研究や教育の機会を得たことは、刺激でもありまた良い経験であった。とはいえ教育や研究に対する不安や焦り、葛藤なども無論あった。

1985年の着任以来、法のより深い理解を得るために、従来の法学から「法と経済学」研究に本格的に取り組んだ。また、法学界において強まってきた実務志向や、法が知識や解釈技術の体系であるかのような見方に飽き足らず、法は法だけで決まらないことを明らかにするために「法と文学」にまで手を広げるようになった。多様な学問の地である北大での30年間をそのように過ごせたことは幸福な思い出である。支えていただいた多くの人たちに感謝したい。また、法学研究科はじめ北海道大学のご発展を祈ってやみません。

略 歴

生 年 月 日 昭和26年 5月7日
昭和50年 3月 九州大学法学部卒業
昭和52年 3月 九州大学大学院法学研究科修士課程修了
昭和55年 3月 九州大学大学院法学研究科博士後期課程単位取得退学
昭和55年 4月 九州大学法学部助手
昭和56年 4月 大分大学経済学部講師
昭和57年 4月 大分大学経済学部助教授
昭和60年 4月 北海道大学法学部助教授
昭和63年 8月 米国イェール大学ロー・スクール客員研究員
平成2年 7月 (American Council of Learned Societies : ACLS研究奨学生)
平成3年 5月 北海道大学法学部教授
平成8年12月 法学博士（北海道大学）
平成12年 4月 北海道大学大学院法学研究科教授

法学研究科教授

おかだ のぶひろ
岡田 信弘 氏



私は、1970年に入学した後、東京の私立大学における16年間の教員生活を除いて、北海道大学で研究教育を行い、本年3月をもって定年を迎えることになりました。東京で教える立場に立った時の「資源」は、北海道大学の大学院生時代に蓄えたものです。東京の私立大学における忙しさは、それまでに蓄えたものをはき出すことしか許さず、「資源」を充填し豊かにすることは極めて難しい営みとなりました。北海道大学で教員生活を始めた時の最大の喜びは、「資源」を充填するゆとりを得たことでした。

こうした北海道大学の研究教育環境は、国立大学の独立行政法人化などによって少しずつ変化しているように思われます。また、最近の大学の国際化やグローバル化は、この変化をより激しいものにしていないのでしょうか。その結果、日本の大学は、豊かな多様性とは逆の方向に向かっているような感じがします。そのことが、学生や若い研究者にとって望ましい方向であれば良いのですが、はたしてそうでしょうか。北海道大学がこれからも多様な形で深くかつ豊かに考えることのできる場であり続けることを切に祈念して、お世話になった方々への感謝の言葉に代えたいと思います。

略 歴

生年月日	昭和26年8月23日
昭和49年3月	北海道大学法学部卒業
昭和51年3月	北海道大学大学院法学研究科修士課程修了
昭和54年3月	北海道大学大学院法学研究科博士後期課程単位修得退学
昭和54年4月	北海道大学法学部助手
昭和55年4月	明治学院大学法学部専任講師
昭和58年4月	明治学院大学法学部助教授
平成4年4月	明治学院大学法学部教授
平成8年4月	北海道大学法学部教授
平成12年4月	北海道大学大学院法学研究科教授
平成14年12月	北海道大学評議員
平成16年4月	
平成16年12月	北海道大学大学院法学研究科長・法学部長
平成18年12月	

医学研究科教授

さくらぎ のりあき
櫻木 範明 氏



自立した良い医師、すなわち医療プロフェッショナルを育てる（教育）、研究と臨床を融合した実践を通して若手医師に未来へ向かってもらう（研究）、北大産婦人科の医療で日本、世界をリードする（診療）を目標に、14年にわたり医学研究科・医学部教授として奉職しました。初期臨床研修制度により大学の医師不足、地域病院への医師派遣中断、お産のできない地域の発生が起きました。これを契機に平成20年に北大と地域病院の産婦人科医がまとまり、若手医師教育と地域医療充実に知恵と力を出し合う組織として一般社団法人WIND（女性の健康と医療を守る医師連合）が設立されました。この組織の理念と研修の仕組みは本年スタートする新専門医制度と一致しています。研究では、神経を温存しつつ子宮頸癌を治療する手術の確立とLancet掲載の子宮体癌に対するリンパ節郭清の意義の解明などがあります。子宮体癌研究はp53変異やmicroRNA発現異常の研究へと発展しました。診療では、神経温存手術が国内外で認識され子宮頸癌患者のQOL改善に貢献しており、最近ロボット神経温存手術を導入しました。また、子宮体癌リンパ節郭清について全国的な臨床試験が北大主導で始まります。

顧みて臨床講座の使命はある程度果たせたかと思いますが、手の届かなかったこと、十分に期待に応えられなかったこともあります。今後は特任教授任期中に後任の方に引き継ぐ体制を整えて、北大キャンパスを卒業したいと考えています。

略 歴

生年月日	昭和26年7月24日
昭和57年4月	北海道大学医学部附属病院助手
昭和63年12月	函館中央病院産婦人科主任医長
平成元年4月	北海道大学医学部附属病院講師
平成5年7月	JA北海道厚生連総合病院札幌厚生病院産婦人科部長
平成8年10月	北海道大学医学部附属病院講師
平成11年2月	北海道大学医学部講師
平成11年5月	北海道大学医学部助教授
平成12年4月	北海道大学大学院医学研究科助教授
平成14年8月	北海道大学大学院医学研究科教授、北海道大学病院婦人科長
平成22年4月	北海道大学病院腫瘍センター長兼任
平成24年4月	日本学術振興会学術システム研究センター主任研究員併任
平成26年2月	

医学研究科教授

みなかみ ひさのり
水上 尚典 氏



2001年4月に自治医科大学から北大に着任以来あつという間の14年間でした。着任当時はこれがacademic societyかと思ふばかりの教授会の状況でしたが、その後の変革はめざましく、今では北大で仕事ができたと誇りに思っています。この間、多くの方々のご支援により、自分なりに満足できる仕事ことができました。まず、その第一点は2008年10月開始となった札幌市産婦人科救急システム構築に貢献できたことでした。これは、現在も稼働中で患者発生から適切な医療施設への搬送のための時間短縮に大きく貢献しています。また周産期医療三次施設に勤務する医師の過労状況緩和に一定程度効果をもたらしたと自負しています。第二点は本邦において百家争鳴状態にあった産科標準医療に関して、これら混乱に終止符を打つべく産科診療ガイドライン（2008年初版、2011年版、2014年版）の3巻の発刊に作成委員長として関わり、本邦における周産期医療の安定供給に道を拓いたことでした。これもひとえに皆様のおかげと感謝しております。今後の益々の北海道大学のご発展を祈念しています。

略 歴

生年月日 昭和26年10月22日
昭和51年3月 群馬大学医学部卒業
昭和51年5月 自治医科大学産婦人科
昭和58年4月 自治医科大学助手
昭和62年3月 医学博士（自治医科大学）
昭和62年10月 自治医科大学講師
平成8年9月 自治医科大学助教授、
自治医科大学付属病院総合周産期母子医療センター分娩部部長
平成13年4月 北海道大学大学院医学研究科教授、
北海道大学病院産科長並びに周産母子センター部長

医学研究科教授

みわ そういち
三輪 聡一 氏



昭和51年3月に京都大学医学部卒業後、脳神経外科での2年の研修、博士課程での4年間の研究を経て、薬理化学教室の助手として雇っていただき、北大着任までの18年間で京都で過ごしました。平成12年10月から医学研究科細胞薬理学分野の教授として約15年間お世話になりました。この間単身赴任で苦勞も多かったのですが、逆に学問と研究に打ち込むことができました。北大に着任後、細胞膜ホルモン受容体であるエンドセリン受容体に関する研究を展開してきました。幸いにも、北大に移ってからは決して高額ではないけれども安定的な公的研究費と優秀なスタッフや大学院生に支えられて、ある程度納得がいく研究成果を挙げられたと思っています。研究成果は、北大の優秀で研究熱心な医学部学生の研究力に負うところも大いにあります。一方で、学部生の教育にはかなり熱心に取り組み、医学部学生に少しでもインパクトを与えられたのではないかと自負しています。また、外部から着任した教授として、医学研究科の考え方の多様性を高めるため、教授会などの会議では積極的に発言させていただきました。最後に、北海道大学のますますの発展をお祈りします。

略 歴

生年月日 昭和26年6月8日
昭和51年3月 京都大学医学部医学科卒業
昭和51年7月 } 京都大学医学部附属病院医員
昭和52年6月 }
昭和52年7月 } 兵庫県立塚口病院医員
昭和53年3月 }
昭和57年3月 京都大学大学院医学研究科博士課程修了
昭和57年3月 医学博士（京都大学）
昭和57年4月 京都大学医学部助手
平成元年5月 京都大学医学部講師
平成元年5月 } スウェーデンウプサラ大学化学研究所に留学
平成元年11月 }
平成4年5月 京都大学医学部助教授
平成12年10月 北海道大学大学院医学研究科教授

医学研究科教授

ふくだ さとし
福田 諭 氏



私は大学紛争さめやらぬ昭和45年に北海道大学に入学し、昭和51年に医学部耳鼻咽喉科学講座に入局、その後1年間の関連病院研修と2年間の米国留学を除き、ずっと北海道大学でお世話になりました。このすばらしいキャンパスの中で42年間もの間、学生としてまた教育・診療・研究に従事できたことは本当に幸せでした。

最近の学生・大学院生や若い方を見ていて、せっかくこの北海道大学に入ったのだから、あまりこじんまりと平均的・画一的に小さくまとまらないで、「大志を抱け」の教訓どおり少し荒けずりでも大きく伸びて行って欲しいと感じています。

また平成22年から3年間ではありますが、北海道大学病院長として管理・運営に携わる機会を得て、今までとは全く違った視点で色々な仕事をさせていただいたことも私にとっては大変貴重な経験でありました。

札幌で生まれ、札幌で育ち、あこがれであったこの北海道大学に入学し、長きにわたり良い環境で仕事ができたと、あらためて感謝の気持ちで一杯です。

最後になりますが、母校北海道大学と医学部・医学研究科、北海道大学病院のますますの発展を心より祈念いたしております。

略 歴

- 生 年 月 日 昭和26年9月9日
- 昭和51年3月 北海道大学医学部医学科卒業
- 昭和51年7月 北海道大学医学部附属病院医員
- 昭和54年2月 北海道大学医学部助手
- 昭和60年10月 } 米国カリフォルニア大学サンディエゴ校
- 昭和62年7月 } 耳鼻咽喉科・頭頸部外科学講座ポスドク
- 昭和60年12月 医学博士（北海道大学）
- 昭和62年10月 北海道大学医学部附属病院講師
- 平成8年5月 北海道大学医学部助教授
- 平成12年4月 北海道大学大学院医学研究科助教授
- 平成13年7月 北海道大学大学院医学研究科教授
- 平成19年4月 } 北海道大学病院副病院長、地域医療連携福祉センター長
- 平成22年3月 }
- 平成20年1月 } 北海道大学病院腫瘍センター長
- 平成22年3月 }
- 平成22年4月 } 北海道大学病院長、
- 平成25年3月 } 北海道大学教育研究評議会評議員、副理事
- 平成25年4月 } 北海道大学探索医療教育研究センター長
- 平成26年9月 }

医学研究科教授

てらざわ こういち
寺沢 浩一 氏



昭和47年に入学してから43年が経つ。早いものである。統計学の山元周行先生が、ある時、授業中に学生を構内に連れ出し、早く進む春の中を、オオバナノエンレイソウやキバナノアマナを示してくださった。

明峯哲夫先生の生物学の内容はまったく思い出せないが、試験の答案の裏に「都ぞ弥生」の歌詞を書けば落第しない、ということが言われていて、必死になって覚えたことを思い出す。「延齡草の真白き花影」は美しいことばだ。

植物園にも教養時代は毎週のように通った。植物が好きだったこともあるが、これもどなたかが、学生証を持っていけば無料になるから行く度に儲かるとおっしゃったからでもある。国語講読の五十嵐三郎先生であったか？

このように、植物に囲まれた北大で学生時代、教員時代を過ごしてきたことに今気がついた。

現在の医学部の正面玄関の2階の三角破風に付けられているレリーフには、両側に伸びているアカンサスの中にエンレイソウの花があしらわれている。旧本館（大正12年竣工）のレリーフをもとに医学部OBたちのアイデアをとりまとめる役目に加わっていたが、このデザインに至った時の安堵感は、北大で暮らしてきた長い時間と重なるものがあったことに思い至る。

長い間大変お世話になりました。ありがとうございました。

略 歴

- 生 年 月 日 昭和27年1月2日
- 昭和53年3月 北海道大学医学部卒業
- 昭和56年3月 北海道大学大学院医学研究科博士課程中途退学
- 昭和56年4月 北海道大学医学部助手
- 昭和58年6月 医学博士（北海道大学）
- 昭和58年7月 北海道大学医学部講師
- 昭和61年4月 北海道大学医学部助教授
- 平成4年1月 北海道大学医学部教授
- 平成12年4月 北海道大学大学院医学研究科教授

医学研究科教授

ふじた ひろよし
藤田 博美 氏



木原 均先生のゲノムという概念が誕生したキャンパスで、研究生生活の後半16年半を過ごしました。在米時代から帰国後にかけて世界の仲間たちと競った、転写制御（end product feedback）を利用した肝性ポルフィリン症の急性発症予防が、20余年過ぎた2013年8月に我が国でも可能になりました。北大では細胞機能を利用した多剤耐性菌感染の発症予防法の開発（http://www.hokudai.ac.jp/news/130322_pr_med.pdf）などに、皆さんが頑張ってくれました。許容濃度や環境基準管理を主とした従来の受動的な予防から、フロンティアとしての転写制御や細胞機能を利用した能動的予防の開拓へと時は移っています。

酵素反応速度論の泰斗レオノール・ミハエリスとの共同研究（Biochem Zschr, 143:484-91, 1923）から始まる衛生学の五代目としての務めを十全に果たせたのか、自分にも良く判らないままに退任の日を迎えることになりました。ただ、研究室のメンバーに恵まれたお蔭で、私自身の能力では思いもかけないような成果と出会うことができました。感謝申し上げます。

略 歴

生年月日 昭和26年8月4日
昭和51年3月 京都大学医学部卒業
昭和55年3月 京都大学大学院医学研究科単位取得退学
昭和55年4月 京都大学医学部研修員
昭和56年9月 東北大学医学部助手
昭和57年1月 医学博士（京都大学）
昭和60年9月 ロックフェラー大学准研究員
平成2年7月 ロックフェラー大学助教授
平成3年10月 東北大学医学部助教授
平成10年4月 東北大学大学院医学系研究科助教授
平成10年9月 北海道大学医学部教授
平成11年4月 北海道大学大学院医学研究科教授

水産科学研究院教授

いいだ こうじ
飯田 浩二 氏



北海道大学に奉職以来34年の月日が流れ、いよいよ定年退職を迎えることになりました。食糧の確保と地球環境の保全は人類に課された課題であり、地球表面の7割を占める海洋からの食糧資源の持続的利用は不可欠です。私は漁業の生産現場で活用される電子技術、特に魚群探知機などの水中音響技術に強く心を惹かれました。爾来水中音響技術の発展は著しく、計量魚群探知機やスキャニングソナーなど漁業を飛躍的に発展させ、水産資源調査にも活用されるようになりました。時代の変化とともに私の研究対象も魚類、浮遊生物、海棲哺乳類等に広がりましたが、常に研究の中心は水中音響の平和的利用にありました。幸いにも研究初期に工学部の青木由直教授と出会い、マイクロコンピュータの技術を習得して、研究をより一層発展させることができました。平成13年から10年間続いた韓国との拠点大学交流では延べ1000人の研究者が交流し、多くの留学生の受入と修士、博士の輩出に貢献できたことは記憶に新しい思い出です。多くの卒業生が母国で活躍しており、将来両国の交流に貢献されることを期待しています。学内の運営に関しては、評議員を通算で3期6年間務めました。函館、札幌間は鉄道で往復7時間、少なくとも1000時間以上は鉄道を走っていたこととなります。おかげで多くの先生方と交流でき、総合大学である北海道大学の偉大さを実感した次第です。最後に、未熟な私をこれまで育ててくれた北海道大学とすべての教職員の皆様に感謝いたします。

略 歴

生年月日 昭和26年7月27日
昭和51年3月 北海道大学水産学部漁業学科卒業
昭和54年3月 北海道大学大学院水産学研究科修士課程修了
昭和56年8月 北海道大学大学院水産学研究科博士後期課程中途退学
昭和56年8月 北海道大学水産学部助手
昭和62年6月 水産学博士（北海道大学）
昭和63年4月 北海道大学水産学部講師
平成3年10月 北海道大学水産学部助教授
平成10年10月 北海道大学水産学部教授
平成12年4月 北海道大学大学院水産科学研究院教授
平成14年4月 } 北海道大学評議員
平成16年3月 }
平成17年4月 北海道大学大学院水産科学研究院教授
平成18年4月 } 北海道大学大学院水産科学研究院副研究院長
平成20年3月 }
平成22年4月 } 北海道大学教育研究評議会評議員
平成26年3月 }

水産科学研究院教授

ひらいし とも のり
平石 智徳 氏



北の大地にあこがれて北海道大学に入学以来、40数年間を北海道で過ごしてきました。徳島で遊んだ紀伊水道の海とは違った、多くの魚介類の宝庫である北海道の海とそこに生息する生物の生態や捕獲する技術について観測し解析できたことは大きな喜びです。

4年生に配属された講座が研究生活の始まりですが、私が興味を持った魚類の遊泳運動の解析を認め、指導していただいた先生方に感謝したいと思います。なかでも佐藤 修先生にはスキューバダイビングを教えていただき、北海道の数多くの沿岸に潜り、海中での実際の生物の行動や生態を知ることが出来たことはその後の私の研究に大いに役立っています。また漁業技術として刺網、桁網、カニかごなどで蛸集に必要な生物の生理学的な研究を手がけ、対象生物を捕らえるための漁獲過程の解析を進めることが出来ました。

北海道大学も4学期制への移行などで大きな変革の時代を迎えますが、着実に進展されることと確信しております。最後に在職期間にお世話になった多くの方々に感謝します。

略 歴

生 年 月 日 昭和27年 3月21日
 昭和51年 3月 北海道大学水産学部漁業学科卒業
 昭和55年 3月 北海道大学大学院水産学研究科修士課程修了
 昭和61年 3月 北海道大学大学院水産学研究科博士後期課程単位取得退学
 平成元年 3月 水産学博士（北海道大学）
 平成元年 4月 財団法人水産科学研究奨励会研究助手
 平成元年 7月 東京大学海洋研究所助手
 平成2年 7月 北海道大学水産学部助手
 平成4年 7月 北海道大学水産学部講師
 平成10年10月 北海道大学水産学部助教授
 平成12年 4月 北海道大学大学院水産科学研究科助教授
 平成17年 4月 北海道大学大学院水産科学研究院助教授
 平成19年 4月 北海道大学大学院水産科学研究院准教授
 平成22年12月 北海道大学大学院水産科学研究院教授

水産科学研究院教授

こんの く に ひこ
今野 久仁彦 氏



内陸山形から北大水産学部に入學し、そのまま大学院進學、運よく大学に奉職し、今年の3月に定年を迎えようとしている。時代、時代に巡り合った学生を含めた人々のおかげで本日を迎えることができた。改めて感謝したい。大学院進學後は一貫して筋肉タンパク質を研究対象としてきたが、大学院時代、カリフォルニア大学サンフランシスコ校留学中は基礎研究を、帰国後は食タンパク質資源としての筋肉の研究にシフトした。この経験から水産のような応用の分野では、基礎的研究がその後の応用研究の深度に重要な役割を果たすことを実感した。私が経験したような、若い時代に様々なことにチャレンジできる環境を維持することこそ、その分野、しいては北大の発展に重要であると信ずる。今後とも、そのような環境が北大に維持されることを期待するものである。

ここ15年くらいは魚食文化を共有するアジア諸国の水産資源利用で何が貢献できるかを模索してきた。水産先進国である日本で培われた知見を、これらの国々に伝承、継承してもらうように行動してきたつもりである。海外の人材育成の分野でも、ますます北大が貢献することを祈念するものである。

略 歴

生 年 月 日 昭和27年 2月28日
 昭和49年 3月 北海道大学水産学部水産食品学科卒業
 昭和51年 3月 北海道大学大学院水産学研究科修士課程修了
 昭和52年10月 北海道大学大学院水産学研究科博士後期課程中途退学
 昭和52年10月 北海道大学水産学部助手
 昭和56年 6月 水産学博士（北海道大学）
 昭和59年 6月 } カリフォルニア大学サンフランシスコ校医学部
 昭和61年 5月 } American Heart Association Fellow
 平成4年 4月 北海道大学水産学部助教授
 平成12年 4月 北海道大学大学院水産科学研究科助教授
 平成13年 4月 北海道大学大学院水産科学研究科教授
 平成17年 4月 北海道大学大学院水産科学研究院教授
 平成24年 4月 } 北海道大学大学院水産科学研究院副研究院長
 平成26年 3月 }

水産科学研究院教授

たかはし これたろう
高橋 是太郎 氏



岩手県から北海道に渡った祖父の代から三代にわたって、北海道大学には大変長きにわたり、お世話になりました。祖父は東北大学の出身でしたが、父は北大農学部、私は北大水産学部の出身で、教員として最初から最後まで在籍させていただきました。感謝の気持ちも一入でございます。

私のような者が36年間もの間、北大教員としてやってこられたのは、私を支えてくださった後進の教員、事務部の方々、そして優秀な学生や大学院生、家族のおかげです。若い頃はそのような気持ちが希薄でしたが、この歳になると、「生かされている」ということを強く実感致します。

研究生活を振り返ってみますと、「知る人ぞ知る」のような自己満足的なものばかりであり、水産学部に相応しい、水産業や国民のためになる貢献ができておりませんでした。漸く定年間際になって、漁業関係者を苦しませ続けてきたヒトデを、価値ある資源に切り替えられる見通しをつけることができたことは、せめてもの救いだと思っております。

さらにまたあと2年、特任教授として在籍させていただきます、また恩息もあと2年、北大工学研究院の大学院生として在籍させていただきますが、呆れずに何卒宜しくお願ひ申し上げます。

略 歴

生年月日 昭和26年8月7日
昭和50年3月 北海道大学水産学部水産食品学科卒業
昭和50年4月 北海道大学農学部林産学科研究生
昭和50年11月 財団法人水産科学研究奨励会研究員
昭和53年3月 北海道大学大学院水産学研究科修士課程修了
昭和54年1月 北海道大学大学院水産学研究科博士後期課程中途退学
昭和54年2月 北海道大学水産学部助手
昭和59年12月 水産学博士（北海道大学）
昭和61年4月 北海道大学水産学部助教授
平成8年4月 北海道大学水産学部教授
平成12年4月 北海道大学大学院水産科学研究科教授
平成17年4月 北海道大学大学院水産科学研究院教授

地球環境科学研究院教授

よしかわ ひさゆき
吉川 久幸 氏



平成14年4月に北海道大学へ赴任し、13年間教育・研究に携わらせていただきました。北海道大学赴任前は、つくばの気象研究所で研究を行っておりましたので足かけ35年間、研究をやらせてもらったこととなります。気象研究所では常にプロジェクト研究に参画し、研究資金の心配をしたことがありませんでした。一方、北海道大学では研究資金の確保が常に頭から離れませんでした。多くの研究仲間と共に成果を上げることが出来たと思っています。教育に関しては、自分が学部生や大学院生だった頃の授業のイメージがなく、正直、こんなに真面目に授業するのかと思いました。今どきの大学院生気質に時代の流れを実感することもありましたが、研究に打ち込んでいる姿は昔から変わらず、自分自身にも喜びを感じる事が出来ました。僅かかもしれませんが、研究の楽しさや喜びを伝えられたのではないかと考えています。

大学に対する社会の「要請」と大学としての「思い」の狭間で、今後北海道大学も苦悩する場面があるかと思えます。そのなかで北海道大学は北海道大学らしく、ますます発展されることを心から願っております。

略 歴

生年月日 昭和26年9月3日
昭和49年3月 名古屋工業大学工学部工業化学科卒業
昭和51年3月 京都大学大学院理学研究科修士課程修了
昭和54年3月 京都大学大学院理学研究科博士課程単位修得退学
昭和54年4月 日本学術振興会奨励研究員
昭和55年4月 運輸省気象庁気象研究所研究官
昭和55年5月 理学博士（京都大学）
平成13年1月 国土交通省気象庁気象研究所研究官
平成14年4月 北海道大学大学院地球環境科学研究科教授
平成17年4月 北海道大学大学院地球環境科学研究院教授

理学研究院教授

もぎ とおる
茂木 透 氏



1999年9月に北海道大学に赴任してきてから15年余り、良き先輩、同僚、学生諸氏とともに楽しく研究や教育に励んできました。北海道のすばらしい自然の中、いろいろなところで観測研究ができたことはこの上ない幸せでした。思い出として強く残っていることは、赴任後まもない2000年3月に起こった有珠山の噴火です。それ以前にも火山噴火の観測は何回も経験がありましたが、町の直近で噴火が起きて多くの住民の方が避難するという状況には、緊迫感があり、学者にも大きな社会的責任があることを痛感させられました。そして、2011年東北地方太平洋沖地震。津波が町をのみこむシーンを見ていて、こんなことが本当に起こっていいのか、信じられない気持ちでした。その後の原発事故も重なって、科学技術の信頼性が問われることになり、学会等でもいろいろな話し合いをしました。多くの方が不意に亡くなったり傷ついたりすることは本当に悲惨なことです。地震や火山噴火は止められませんが、それらの発生が予測されて、人々が安全なところに避難できるようになることを願っています。そのような研究に励んできましたが、まだ道半ばです。これからの若い研究者の奮闘を期待しています。

略 歴

生年月日 昭和26年9月17日
 昭和50年3月 京都大学工学部卒業
 昭和52年3月 京都大学大学院工学研究科修士課程修了
 昭和55年3月 京都大学大学院工学研究科博士後期課程単位修得退学
 昭和55年4月 株式会社建設企画コンサルタント
 昭和59年4月 京都大学理学部研修員
 昭和60年5月 九州大学工学部助手
 昭和62年2月 工学博士（九州大学）
 平成11年4月 九州大学大学院工学研究科助手
 平成11年9月 北海道大学大学院理学研究科附属地震火山研究観測センター助教授
 平成17年4月 北海道大学大学院理学研究科附属地震火山研究観測センター教授
 平成18年4月 北海道大学大学院理学研究院附属地震火山研究観測センター教授
 平成18年4月 } 北海道大学大学院理学研究院附属地震火山研究
 平成20年3月 } 観測センター長

理学研究院教授

のむら かずしげ
野村 一成 氏



北大に着任して30年になろうとしていますので、これまでの人生のおよそ半分を北海道で過ごしたことになります。私の専門は、低温における物性研究で、その実験研究には液体ヘリウムが不可欠でした。北大には、諸先生方のご尽力で当時液化センターが既に設置されていて、この点で不自由はありませんでした。一方、測定装置は手作りから始めて構築しましたが、現在の環境とは大きく異なっていたことが懐かしく思い起こされます。この結果、新しい測定手段を取り入れるなどして、今日まで研究を続けることができました。皆様に感謝しています。

教育も、講義は北大に来て初めて担当しました。物理の基礎教育の本質は変わらないのですが、そのやり方は入試制度の変更や新しい機器の導入などにより、現在までに大きく変わっています。この中で、独自の視点を加えつつ行ってきたつもりですが、思うように学生に伝わったかどうかは定かではありません。今考えると、あの時ああやれば良かったと思うところも多々あります。

退職するにあたり、北海道大学のさらなる発展を心から願っています。

略 歴

生年月日 昭和26年9月18日
 昭和49年3月 東京大学理学部卒業
 昭和51年3月 東京大学大学院理学系研究科修士課程修了
 昭和54年3月 東京大学大学院理学系研究科博士課程修了
 昭和54年3月 理学博士（東京大学）
 昭和54年4月 東京都立大学理学部助手
 昭和60年10月 北海道大学理学部講師
 昭和62年11月 北海道大学理学部助教授
 平成6年4月 北海道大学理学部教授
 平成7年4月 北海道大学大学院理学研究科教授
 平成18年4月 北海道大学大学院理学研究院教授

理学研究院教授

てらお ひろあき
寺尾 宏明 氏

私自身の北大との直接的なつながりは、1996年に理学研究科に赴任したときに始まります。私は、自分の研究が国内で正当に評価されていない、という思い込みから渡米、ウィスコンシン大学マディソン校で、教育・研究に従事していました。米国に骨を埋めるつもりでいた1996年、不思議な出会いと予期せぬ偶然が重なり、北海道大学での職を得ることができました。幸運でした。このように書くと、北大奉職以前は、北大との縁が薄いように思われるかもしれませんが、実は、私が初めて目にした理学部の建物は、北大理学部本館なのです。米国の学年歴の関係で、1996年7月1日に赴任して、重厚な外壁に護られた初夏の北大理学部本館前の芝生に立った時、高校の夏休みに、父とふたりで北海道旅行をした際、北大を訪れた記憶が蘇りました。その時の写真も探し出しました。その後、家族の教育の関係で一時期東京に引っ越しましたが、前後併せて10年9か月に及ぶこれまでの札幌暮らしの中で、公私ともに充実した大学教員生活を送ることができました。これも、ひとえに北大の同僚・仲間・学生と家族のおかげです。皆様、本当に有難うございました。

略 歴

生 年 月 日	昭和26年 8月13日
昭和49年 3月	東京大学理学部卒業
昭和51年 3月	東京大学大学院理学系研究科修士課程修了
昭和52年 3月	東京大学大学院理学系研究科博士課程退学
昭和52年 4月	国際基督教大学助手
昭和54年 4月	国際基督教大学講師
昭和56年 3月	理学博士（京都大学）
昭和56年 4月	国際基督教大学助教授
平成 2年 6月	米国ウィスコンシン大学マディソン校数学科准教授
平成 5年 8月	米国ウィスコンシン大学マディソン校数学科教授
平成 8年 7月	北海道大学大学院理学研究科教授
平成10年 4月	東京都立大学大学院理学研究科教授
平成17年 4月	公立大学法人首都大学東京都市教養学部教授
平成18年 4月	北海道大学大学院理学研究院教授
平成23年 4月	北海道大学大学院理学院長
平成25年 3月	
平成25年 4月	北海道大学大学院理学研究院長・理学院長・理学部長
平成27年 3月	

理学研究院教授

たかはた まさかず
高畑 雅一 氏

私が北海道大学に入学したのは1971年の春だったから、今年で44年になる。その間、学生・大学院生・教員としてこのキャンパスに通い続けた。途中1年半の外国生活があったが、社会人としての人生のほぼすべては、このキャンパスで終始した。定年を迎えた今、気がつけばそんな年齢になっていた、などと陳腐なレトリックには耽るまい。数年前の会議で退職予定者リストの末尾に自分の存在を認めて以来、毎日のように定年を意識していた。仕事も指導学生も生活も、定年を見据えて調整してきたつもりだ。そして今、2年の特任延長があるにせよ、兎にも角にも定年退職を目前に控えて、私は片づけ始めた午後の部屋に佇んでただ無然としている。来るべきものは必ず来るという人生の鉄則を嘯みしめながら。

北大では多くの出会いがあった。先生方や同僚・友人・学生諸氏、そして事務・技術・業者の方々。ここに心よりの謝意を表しておきたい。もちろん最大の感謝はこの北大キャンパスに！高校・予備校生活までを送った町から二晩の夜行列車と青函連絡船とを乗り継いで札幌に来た私にとって、北大の魅力は北海道という風土と分かちがたく結びついている。願わくはこれからも北大と北海道が「内地」の若者を惹きつけ、温かく受け入れる寛大な存在であり続けますように。

略 歴

生 年 月 日	昭和26年 9月18日
昭和50年 3月	北海道大学理学部卒業
昭和52年 3月	北海道大学大学院理学研究科修士課程修了
昭和52年 4月	北海道大学大学院理学研究科博士課程退学
昭和52年 5月	北海道大学理学部助手
昭和57年 3月	理学博士（北海道大学）
平成元年 4月	北海道大学応用電気研究所助教授
平成 4年 4月	北海道大学電子科学研究所助教授
平成 5年 4月	北海道大学理学部教授
平成 7年 4月	北海道大学大学院理学研究科教授
平成18年 4月	北海道大学大学院理学研究院教授

理学研究院准教授

ち きた かずひさ
知北 和久 氏



昭和54年に本学理学研究科で理学博士の学位を取得して以来、約36年間にわたって陸水学、特に、湖沼・河川における陸水営力学を専門として研究を続けてきました。これまで、国内をはじめ、アラスカ、カナダ、ヒマラヤなどの湖沼・河川で学術調査をしてきました。ここまで無事に来られたのは、地元の方をはじめ多くの同僚・知人・学生の支えがあったからと心から感謝しております。特に、ヒマラヤでは標高5100mの湖で調査をしましたが、空気が希薄なため一般の星（恒星）が全く瞬かす、まさに“星が降る夜”を学生・同僚と共に体験したことが印象に残っています。国内では、現地調査を通して多くの学生と自然に触れ、そして彼らが巣立っていくのを見届けることができたことを嬉しく思っています。現在は、倶多楽火山の活動に関する調査を行っています。今後も、温暖化や火山・地震による自然災害の発生が懸念されるため、退職後も引き続いて研究を続けたいと思っています。これから2年間、留学生を含め6人の大学院生・学部生を無事に送り出すことが、私の最後の務めと思っています。最後に、今日まで充実した研究生生活を送ることができたことに対し、北海道大学に感謝申し上げます。そして、多くの若手研究者が、災害に対する社会の要請に応えることができるよう基礎研究に励むことを期待しています。

農学研究院教授

ます だ きよし
増田 清 氏



上の世代の熱気が急激に冷却し始めたころ、社会人として仕事に就くことに踏み切れず、津軽海峡を渡り北大農学研究科を受験しました。研究者になる道を志しましたが大学に勤めようとは思っていませんでした。それでも、博士課程を修了して助手として採用された時には、何よりも研究が続けられる喜びを感じました。その頃の大学には、組織全体が一丸となってミッションに向かって進む体質を感じませんでしたが、本州の大学に勤務して再び北大に勤めてからは、その方向への急激な変化を感じました。教育と研究への情熱だけが教員の資質であると思っていましたが、社会との親和性が深まるとともに、多様な教員像が求められるようになり、自らの生態的地位について自問することもしばしばでした。組織が変化する最大の原動力は世代の更新だと思っています。退職までの2年間でこれまでに知り得たことを若い人たちに伝え、次の世代に託したいと思っています。北大での生活はとても楽しいものでした。研究を共にしてくれた学生諸君と教育・研究の場を与えていただいた北海道大学に心より感謝申し上げますとともに、次の世代に向けて輝かしい発展のあることを祈念しています。

略 歴

生 年 月 日 昭和26年 4月13日
 昭和50年 3月 横浜市立大学文理学部卒業
 昭和53年 3月 北海道大学大学院農学研究科修士課程修了
 昭和56年 3月 北海道大学大学院農学研究科博士課程単位修得退学
 昭和57年 3月 北海道大学大学院農学研究科博士課程修了
 昭和57年 3月 農学博士（北海道大学）
 昭和57年 6月 北海道大学農学部助手
 昭和61年 4月 秋田県立農業短期大学助教授
 平成 7年 1月 北海道大学農学部助教授
 平成11年 4月 北海道大学大学院農学研究科助教授
 平成16年 6月 北海道大学大学院農学研究科教授
 平成18年 4月 北海道大学大学院農学研究科教授
 平成19年 4月 北海道大学北方生物圏フィールド科学センター教授
 平成26年 4月 北海道大学大学院農学研究科教授

農学研究院教授

うぶかた まこと
生方 信 氏

北大に赴任してから11年半を迎えようとしている。農学部でのテーマとしては珍しかった抗生物質の合成研究から学問の世界に入り、昭和55年に博士課程を修了した。同年、9年間を過ごした札幌を離れ、アメリカ中西部にあるインディアナ大学に留学。昭和57年に埼玉県和光市にある特殊法人理化学研究所で新たな研究をスタートした。博士研究員待遇の特別研究生等を経て、昭和59年7月に研究員に採用され新規抗生物質の化学的研究を行った。副主任研究員を経て平成7年に富山県立大学工学部に赴任、新設研究室において教育研究の枠組みを含むゼロからの立ち上げと、梁山泊を彷彿とさせる生物工学研究センターでの様々な人々との出会いに恵まれた。平成15年に北大に戻りキャンパス・研究林の自然の豊かさと大きさを再認識した。充実した時間を過ごしてきたが、時には明治24～30年までの札幌農学校廃校の危機にあたっての新渡戸稲造博士の奮闘が支えになった。北大のキャンパスの美しさは変わらない。「人生の目的は、心豊かな人間として完成するにある」とした新渡戸の言葉を胸に、学生や志を同じくする人々と、あと2年ほど努力を続けることにする。

略 歴

生年月日 昭和26年7月16日
 昭和50年3月 北海道大学農学部卒業
 昭和52年3月 北海道大学大学院農学研究科修士課程修了
 昭和55年3月 北海道大学大学院農学研究科博士課程修了
 昭和55年3月 農学博士（北海道大学）
 昭和55年7月 米国インディアナ大学リサーチアソシエイト（博士研究員）
 昭和57年4月 } 特殊法人理化学研究所・雪印乳業株式会社生物科学研究所
 平成7年3月 }
 平成7年4月 富山県立大学工学部教授
 平成15年10月 北海道大学大学院農学研究科教授
 平成18年4月 北海道大学大学院農学研究院教授

農学研究院教授

まるたに ともみ
丸谷 知己 氏

母校である北海道大学に戻って、10年余りが経ちました。私は他機関で過ごした時間が長いので、北大とは、学生時代とこの10年余の計16年ほどのお付き合いでした。北大での在職10年のうち大半の時間は管理業務に割かざるを得ませんでした。贅沢かもしれませんが、本当にやりたかった自然災害の研究はまだできていません。これから先、いつまでボケないでいられるかわかりませんが、周囲にご迷惑をかけない範囲で、もう一度原点に戻って勉強したいと考えています。気候変動が進む現代、自然災害は人類にとって重要な課題のひとつです。この先如何ばかりでも、私どもの研究成果が社会に実装され、人類の幸福につながれば幸いです。この期に及んで、あれこれ残す言葉はありません。一言だけ申せば、業績だ、評価だとせかされずに、ゆったりした時間の中で、じっくりと考えて研究し、その成果をしっかりと学生に伝えたかったな、と思います。促成栽培では本物はできません。最後に、これまで、私の傍若無人の素行にも関わらず、多くの教員や事務の方々を支えていただきました。本当にありがとうございました。また、どこかでお会いする日を楽しみにしています。

略 歴

生年月日 昭和26年9月6日
 昭和50年3月 北海道大学農学部卒業
 昭和52年3月 北海道大学大学院農学研究科修士課程修了
 昭和52年4月 北海道大学大学院農学研究科博士課程退学
 昭和52年5月 九州大学農学部助手
 昭和63年2月 農学博士（九州大学）
 平成元年3月 九州大学農学部助教授
 平成8年2月 文部省在外研究員（ニュージーランド ランドケア研究所）
 平成12年4月 信州大学農学部教授・岐阜大学大学院連合農学研究科教授
 平成16年7月 北海道大学大学院農学研究科教授
 平成18年4月 北海道大学大学院農学研究院教授
 平成21年4月 } 北海道大学大学院農学研究院副研究院長・農学
 平成25年3月 } 院副院長・農学部副学部長
 平成25年4月 } 北海道大学大学院農学研究院院長・農学院院长・農学部長
 平成27年3月 }

教育学研究院教授

まみや まさゆき
間宮 正幸 氏



近代精神の源流をくむ

16年間在職した北海道大学を定年退職するにあたり、叱咤激励の数々を頂戴した教職員の皆様に心よりお礼申し上げます。実践現場から本学に着任した当初は、心許なく、不安の日々でしたが、あっという間にここに至ったというのが実感です。誠にありがたいことでした。もとより、北大教員への転職は偶然のことでした。ただ、教育学部創設期の教授であった城戸幡太郎（心理学・教育科学）、留岡清男（社会教育）、奥田三郎（特殊教育）といった、戦前から活躍していた錚々たる先駆者への憧憬のごときがあって嬉々として来道したのではありました。着任第1日目に、ポプラ並木傍の新渡戸稲造像に刻まれた“I wish to be a bridge across the Pacific”という言葉が雪降る中手帳に書き写したことも鮮明に記憶しています。すなわち、内村鑑三や新渡戸稲造ら札幌農学校初期の大先達によって築かれた近代精神の源流を何とか自らの手で汲もうとしたことも私の北大におけるささやかな出発点でありました。民主主義、国際主義、科学的精神の涵養ということです。これからも先達のように精進したい。そのように決意を新たにしているところです。

略 歴

生 年 月 日 昭和26年11月30日
昭和50年 3月 信州大学人文学部文学科卒業
平成11年 4月 北海道大学教育学部助教授
平成12年 4月 北海道大学大学院教育学研究科助教授
平成19年 4月 北海道大学大学院教育学研究院准教授
平成21年 4月 北海道大学大学院教育学研究院教授

保健科学研究院教授

みかみ たいせい
三神 大世 氏



今春、定年を迎えますが、4月以降も特任教授として教育・研究を続けさせていただく予定です。北海道大学には、昭和45年に学生として入学以来、わずかな出向や留学の期間を除き、これまで40年以上もお世話になってきました。

私の職歴のスタートは北大病院循環器内科の研修医でした。その当初に黎明期の超音波検査と出会い、以後、その研究に明け暮れてきました。ずっと臨床を志向してきた私にとって、研究は明日の診療にすぐ役立つためのものであり、また、その過程が自らの臨床力を磨いてくれるものでした。超音波検査のその後の大きな発展を考えると、私が果たした役割は微小でしたが、その流れの中で臨床に密着した研究を重ねてこられたのは、とても幸運なことでした。

年号が平成に変わり、検査の担い手の医師から技師への移行が加速します。この時期、臨床検査技師教育を主務とする現職に移籍し、そこで、超音波検査技師のエキスパートを育成する、他に類のない大学院研究室を立ち上げることができました。ここで研鑽した学生たちが次代の超音波検査の牽引者となることを期待しつつ、今しばらくは、北大の若者たちと超音波の魅力をさらに語り合いたいと思っています。

略 歴

生 年 月 日 昭和27年 3月20日
昭和51年 3月 北海道大学医学部医学科卒業
昭和51年 7月 北海道大学医学部附属病院医員
昭和52年 6月 伊達赤十字病院医師
昭和53年 6月 北海道大学医学部附属病院医員
昭和54年 5月 国立循環器病センターレジデント
昭和56年 6月 北海道大学医学部附属病院医員
昭和59年 4月 岩見沢労災病院副部長
昭和60年 4月 北海道大学医学部研究生
昭和60年 9月 医学博士（北海道大学）
平成 5年 5月 北海道大学医学部附属病院助手
平成 6年10月 北海道大学医学部助手
平成 7年 4月 北海道大学医学部附属病院講師
平成 9年 4月 北海道大学医療技術短期大学部助教授
平成16年 4月 北海道大学医学部保健学科教授
平成20年 4月 北海道大学大学院保健科学研究院教授

保健科学研究院准教授

たかはし みつひこ
高橋 光彦 氏

「有り難うございました」。30年間の大学生活は多くの学生・教職員・大学関係者・大学関連団体、患者さんの皆様と、勉学、研究、会議、臨床でお付き合いをさせていただいたことに感謝致します。多くの人との関係を通じて、学ぶことが多々あり、それが日常の力にもなりました。また、この間、家族の支えにも感謝する次第です。物事を見る目が養われました。北海道大学が常に変化を求められる職場であるため、身体的、精神的に自分を管理しなくてはならない能力が必要となるため常に頭の柔軟性が求められたことも印象深い。小生が所属した理学療法専攻の学生数は1学年20名のため、身近な相談相手として学生相談も多々あり、対応が困難な場合は専門の先生に相談し、こちらも勉強になったことも多々ありました。思い返せばきりがなくなりますが、北大を卒業し、知り得た知識、技術を次なる世代に更に伝えていきたいと思っております。皆様方のご健勝とご多幸を願っております。再度「有り難うございました」。

略 歴

生 年 月 日	昭和27年 3月 2日
昭和52年 3月	上智大学理工学部物理学科卒業
昭和56年 4月	東京都立府中病院リハビリテーション科主事
昭和60年 9月	北海道大学医療技術短期大学部助手
平成 4年 4月	北海道大学大学院医学研究科衛生学講座研究生
平成10年 3月	
平成 6年 4月	北海道大学医療技術短期大学部講師
平成 7年11月	北海道大学医療技術短期大学部助教授
平成10年 6月	医学博士（北海道大学）
平成15年10月	北海道大学医学部助教授
平成20年 4月	北海道大学大学院保健科学研究院准教授

工学研究院教授

いしまさ つとむ
石政 勉 氏

定年が近づくにつれて、過去のことを振り返って見る機会が増えたようです。私は学部、大学院、就職、さらに教養部消滅と、各段階で異なる大学や学部、研究室に属してきましたので、色々な指導教員やボスたち、同僚から刺激や影響を受けました（かなり個性的な人達もいましたね）。そして、その中であつた一つの方向性が、その後の私の研究活動を決めたようです。それぞれの時点では、理解できなかったことや関係が無いように見えたことなどが、「準結晶」という一つの具体的な形を成して行くのを40年かけて見てきたように思います。2000年に工学研究科に採用していただき、落ち着いた雰囲気の中で、優秀な学生さん達の力を借りながら一步一步進めることができたことも幸いでした。3年ほど前から、定年後にやり残しが出ないように、研究テーマを3つに絞って取り組んできました。その内の一つで、30年来のテーマである「正12角形相の確立」が見えてきたのも嬉しいことでした。

最後になりますが、これまでの大学生活を支えていただいた皆様に感謝します。

略 歴

生 年 月 日	昭和27年 3月15日
昭和50年 3月	大阪大学基礎工学部卒業
昭和52年 3月	広島大学大学院理学研究科博士課程前期修了
昭和55年 3月	広島大学大学院理学研究科博士課程後期単位修得退学
昭和55年 4月	名古屋大学教養部助手
昭和56年 4月	理学博士（広島大学）
昭和61年10月	名古屋大学教養部講師
平成元年10月	名古屋大学教養部助教授
平成12年 4月	北海道大学大学院工学研究科教授
平成22年 4月	北海道大学大学院工学研究院教授

工学研究院教授

きっかわ しんいち
吉川 信一 氏



機能性セラミックスの大部分は金属酸化物ですが、もっと優れた性質を発現するように「窒素を含むセラミック材料」を発見開発する研究と、無機材料を中心とする化学に関する教育に没頭させていただきました。北海道は本州とは異なり、自由な発想に集中することのできる環境でした。自由な発想に基づいた研究成果を上げておれば、国内はもとより海外からも注目されて科学研究費などの外部資金にも不自由することもなく、国内外の学会のみならず産業界との共同研究も数多く行わせていただきました。若い頃にはまだ存在しなかった無機材料の固体化学の領域の熟成にも貢献させていただきました。この領域の発展した現状を成書とすべく、世界に呼び掛けて“Handbook of Solid State Chemistry”全6巻をWiley社から出版する準備を進めています。自由な発想をする時間を与えていただいた北海道大学の先輩諸兄に感謝するとともに、この時間という北海道大学の大切な財産を守り抜いて、今後とも世界に羽ばたく活躍をされますよう期待しております。

略 歴

- 生 年 月 日 昭和26年12月8日
- 昭和49年3月 大阪大学理学部卒業
- 昭和51年3月 大阪大学大学院理学研究科前期課程修了
- 昭和54年3月 大阪大学大学院理学研究科後期課程修了
- 昭和54年3月 理学博士（大阪大学）
- 昭和54年4月 大阪大学産業科学研究所助手
- 昭和63年10月 大阪大学産業科学研究所助教授
- 平成12年4月 北海道大学大学院工学研究科教授
- 平成22年4月 北海道大学大学院工学研究院教授
- 平成22年4月 } 北海道大学大学院工学研究院副院長長
- 平成24年3月 }
- 平成23年4月 } 北海道大学研究戦略室室員
- 平成25年3月 }

工学研究院教授

あらい まさひこ
荒井 正彦 氏



1970年に大学に入学してこの方ずっと同じ器の中で暮らしてきました。卒業発表は、模造紙（今も売っているのかどうか）を二枚張り合わせたもの数枚に、研究内容をマジックで書いて説明に用いました。発表練習の度に修正を指示され、マジックの匂いに閉口しながら幾度となく書き直しました。時が進むにつれ、アンモニア臭に悩まされながら作成したスライド、書き直しが容易なオーバーヘッドプロジェクター、現在のパワーポイントと変わっていきました。大変な進歩・変化のあった半世紀で、これから大学がどうなっていくのか想像もつきません。

このような時代にずっと大学にいて良かったかどうか。もちろん、自分にとっては好き勝手が出来たので良かったのですが、大学・社会に殆ど何も貢献できなかったことは悔やまれます。「殆ど」と書いたのは、卒業生がいろいろな場所で活躍しているので、これには多少役立っているのかなと思うからです。

本当に楽しい大学生活を過ごさせていただきました。末筆ながら、研究室スタッフと学生皆さんに心から感謝申し上げます。

略 歴

- 昭和49年3月 東北大学工学部卒業
- 昭和51年3月 東北大学大学院工学研究科博士課程前期課程修了
- 昭和54年3月 東北大学大学院工学研究科博士課程後期課程修了
- 昭和54年3月 工学博士（東北大学）
- 昭和54年4月 東北大学非水溶液化学研究所助手
- 昭和61年7月 東北大学非水溶液化学研究所助教授
- 平成3年4月 東北大学反応化学研究所助教授
- 平成12年4月 北海道大学大学院工学研究科教授
- 平成22年4月 北海道大学大学院工学研究院教授

工学研究院教授

なりた よしひろ
成田 吉弘 氏

北大に入学した1970年は学園紛争の末期でした。その後1年間の留学を経て、博士課程を1980年に修了した私は、北海道工業大学（現在の北海道科学大学）に採用され、2004年に縁あって北大に戻りました。その1年前に日本学術振興会の英国派遣研究員として8ヶ月不在にした直後であり、24年間勤務した大学を去ることは抵抗がありました。最終的に温かい送出しを受け、法人化直後の北大で工学研究科機械科学専攻の教授となりました。以来11年間に瞬く間に過ぎました。学生がかわいい(?)のはどの大学でも同じですが、数と学力共に充実した大学院生や科学研究費など北大の恵まれた研究環境は毎日が感謝でした。それでも職業人としては私学育ちのため、北大の文化に慣れるのに3年を要しました。中盤は専攻長や対高校広報の実務、教育担当の副院長となった頃には北大の組織に慣れました。その後は学部運営から離れ、直近の3年間は日本機械学会などで国際関係を担当し北大の名前が学外で顕示されるよう尽くしたつもりです。毎年、国内外の会議の代表となったのも北大の後ろ盾があったからです。11年前には、退職時は「あしたのジョー」のように全力を尽くし蒼白にとイメージしていましたが、そうはならず髪も黒いままで。これから特任教授2年間、その後も北大工学研究院と機械系のために寄与ができればと願っています。

略 歴

生年月日 昭和26年6月7日
 昭和49年3月 北海道大学工学部卒業
 昭和51年3月 北海道大学大学院工学研究科修士課程修了
 昭和55年3月 北海道大学大学院工学研究科博士後期課程修了
 昭和55年3月 工学博士（北海道大学）
 昭和55年4月 北海道工業大学計算機センター講師
 昭和60年4月 北海道工業大学計算機センター助教授
 平成3年4月 北海道工業大学教授
 平成16年4月 北海道大学大学院工学研究科教授
 平成22年4月 北海道大学大学院工学研究院教授
 平成22年4月 } 北海道大学大学院工学研究院副研究院長
 平成24年3月 }

工学研究院教授

もり みちつぐ
森 治嗣 氏

研究に向いているとも深く考えず博士課程に進学したのは、学生研究生として日本原子力研究所（現JAEA）反応度安全研究室（NSRR）で、当時世界最先端の反応度投入事故研究に触れ魅入ったからである。当時のNSRR室長は、その後北大旧原子工学科に転身された原子力安全工学研究室の石川迪夫元教授である。爾来永きに亘り薫陶を受けた。その後約30年の歳月を越えて石川先生の研究室を担当するとは、当時思いも因らなかった。NSRRから大学に戻り反応度安全研究関連で学位取得後、あまり深くも考えず東京下町にあり面白そうだという理由で、疎放のまま重工メーカーを選び高温ガス炉を熱源とする原子力製鉄の開発に携わった。その結果を米国学会で発表した後暫くして、米国マサチューセッツ工科大学原子力工学科の教授から突然レターで招聘され渡米し、ボストンの暮らしの中で研究者として進む決心がついたように思う。電力の研究所を定退して私大を経て北大に赴任して、研究と教育に最後の力を振り絞れたかどうかは今後の評価に委ねるにしても、人生2度目の円満定退を無事迎えることができたのは、偏にエネ環・機械系をはじめとする先生方の優しいご配慮と、事務方々の親切なサポートに依るものと深く謝意を表したい。残された短い期間を、これも与えられた運命と思い最大限の力を尽くし天に与えられた役割を果たそうと思う。

略 歴

昭和51年3月 東北大学工学部卒業
 昭和53年3月 東北大学大学院工学研究科博士課程前期課程修了
 昭和56年3月 東北大学大学院工学研究科博士課程後期課程修了
 昭和56年3月 工学博士（東北大学）
 昭和56年5月 石川島播磨重工業株式会社
 平成元年11月 東京電力株式会社原子力研究所
 平成23年4月 明治大学理工学部客員教授
 平成24年4月 北海道大学大学院工学研究院教授

工学研究院教授

さ さ き かずあき
佐々木 一彰 氏



思い起こせば、北海道大学理類に入学してから今日まで、45年間を北大で過ごしてきたことになりましたが、その間、いろいろな方たちに大変お世話になり、感謝以外の言葉はありません。定年退職の今となっては、北大人であった長い年月にただ驚くばかりですが、振り返ってみれば、学生時代が昨日のことに思い出されます。徹夜で製図を仕上げ、提出のため工学部の廊下を走り回ったこと、研究に疲れては日中のテニス・夜中の卓球や飲み会で心身を癒やしたことなど、今は良い思い出として残っています。博士後期課程を終え、教員として勤務するようになってからは、それまでの研究中心の生活から、学生への教育を中心に、事務的な仕事が増えました。多くの学生と教育・研究だけではなく、スポーツを通して、初めは兄貴のような関係から、父親、最近は祖父のような関係になりつつあるような気がしています。これからさらに2年間、特任教員として北大に在籍する機会をいただきましたので、研究もさることながら、大学は質の高い学生を育てる教育機関であることを忘れず、教育に今まで以上の力を入れたいと思っています。最後になりますが、皆様のご健勝と母校・北海道大学が良い方向に発展することを心から願っております。

略 歴

生 年 月 日 昭和27年 3月15日
 昭和51年 3月 北海道大学工学部卒業
 昭和53年 3月 北海道大学大学院工学研究科修士課程修了
 昭和57年 6月 北海道大学大学院工学研究科博士後期課程修了
 昭和57年 6月 工学博士（北海道大学）
 昭和57年 7月 北海道大学工学部講師
 昭和59年 4月 北海道大学工学部助教授
 平成 9年 4月 北海道大学大学院工学研究科助教授
 平成11年 4月 北海道大学大学院工学研究科教授
 平成22年 4月 北海道大学大学院工学研究院教授

低温科学研究所教授

かわむら きみたか
河村 公隆 氏



東京・八王子から引っ越してきたのは19年前であった。前の職場に比べ実験のスペースが2倍になるなど恵まれた研究環境を整備してもらった北海道大学にはたいへん感謝している。充実した環境の中で、大気エアロゾル・雪氷の地球化学及び大気化学に関わる研究・教育を思い切り出来たこと、この分野で自分の世界を確立し広げられたことはたいへんな幸運であった。美しい北大キャンパスの生活では、東京で悩まされた花粉症からも解放され、健康を回復できたのも大きかった。300近い論文を国際誌を中心に発表してきたが、それらが北大の評価に多少とも貢献したのであれば嬉しい限りである。研究室の拡充に伴い外国人研究者が増え最終的に40名の外国人を受け入れた。最後の10年間は、研究室のゼミが日本語から英語に切り替わっていた。英語が公用語になった時、外国人ポスドクが生き生きと議論を始めた時の情景は今でも鮮明に覚えている。彼等との共同研究は私自身の研究の幅を広げる上で大いに役立った。多くの外国人が母国で教授など重要なポストに就いて活躍しているのも頼もしい。地球環境の問題は今後ますます深刻になるとの予測もある。北海道大学の研究が環境問題の解決に役立つ様、若い皆さんの活躍を期待したい。教授を退任するにあたり、積み残した課題はたくさんあるのは事実だ。しかし、やるべきことは明確になっているので、体力・気力を振り絞って頑張りたい。新たな発見が楽しみでもある。

略 歴

生 年 月 日 昭和26年 6月1日
 昭和49年 3月 静岡大学理学部卒業
 昭和53年 3月 東京都立大学大学院理学研究科修士課程修了
 昭和56年 3月 東京都立大学大学院理学研究科博士課程修了
 昭和56年 3月 理学博士（東京都立大学）
 昭和56年 7月 日本学術振興会奨励研究員
 昭和56年10月 カリフォルニア大学ロサンゼルス校（UCLA）博士研究員
 昭和60年 2月 アメリカ合衆国ウッズホール海洋研究所客員研究員
 昭和62年10月 東京都立大学助教授
 平成 8年 3月 北海道大学低温科学研究所教授

電子科学研究所准教授

つじみ ゆうじ
辻見 裕史 氏

北海道大学に入学し、物理を志してから定年を迎えるまで、物理三昧の日々を送ることが出来たことは小生にとって至極幸福であった。そして、それを支えてくれた多くの方々へ心よりお礼を申し上げる次第である。

物理について語ることも出来そうも無いので、物理を志す方々に、それを修得するための秘策を文章として残したく思う。小生、「試験にでる物理」は良くできた方だが、修士課程1年の時、「本当の物理」を全く理解していないことを痛感し、一時途方に暮れたことがあった。修士課程2年から我武者羅に物理に齧りついた。一つの標語を頼りに。それは、「数式を使わず、自分の言葉で物理を理解する」というものである。この標語を抱き、苦しかったけれども、ほぼゼロの心理状態から、日々物理に真摯に向き合った。結果、いつの時点からか判然としないが、「物理それ自身」とは言わないまでも、「物理の理解の仕方」が身に付いてきた。そのおかげで、今日まで物理を続けられたのだと確信している。たとえ、理論物理を志す方々であっても、効果があると思うので、上記の標語を実践してみても如何だろうか。やたら数式ばかり振り回す人を見ると、「何を勉強しているのか」と詰問したくなるのは、小生が年を取ったせいばかりだけでは無いように思う。老兵は消え去るのみというが、雇用延長で、あと2年間は物理に関わり、その任を全うする所存である。

略 歴

生 年 月 日 昭和26年 9月28日
昭和50年 3月 北海道大学理学部卒業
昭和52年 3月 北海道大学大学院理学研究科修士課程修了
昭和53年 9月 北海道大学大学院理学研究科博士課程退学
昭和53年10月 北海道教育大学教育学部函館分校助手
昭和59年 8月 理学博士（北海道大学）
昭和60年 4月 北海道教育大学教育学部函館分校講師
平成元年10月 北海道教育大学教育学部函館分校助教授
平成5年 4月 北海道教育大学教育学部函館校助教授
平成5年 8月 北海道大学電子科学研究所助教授
平成19年 4月 北海道大学電子科学研究所准教授

北方生物圏フィールド科学センター教授

うえだ ひろし
上田 宏 氏

1971年に北海道大学水産学部へ入学し、1981年に函館から岡崎に移り、北九州から米国へ留学し、1991年に北海道大学に戻り、無事定年退職することになりました。北海道大学では、水産学・生物学上の大きな謎である、サケがどのように生まれた川（母川）を記憶し回帰するのかという、サケの母川記銘・回帰機構に関する研究を行ってきました。シロザケは、稚魚期の母川記銘から親魚期の母川回帰まで約4年かかり、実験可能な期間が数週間に限られる忍耐が必要な研究です。しかし、数多くの国内外の共同研究者及び向学心旺盛な学生・大学院生・ポスドクとともに、バイオテレメトリー手法を用いたシロザケのベーリング海から北海道沿岸までの回遊行動、内分泌学的手法を用いた母川記銘時の脳-下垂体-甲状腺系ホルモン及び母川回帰時の脳-下垂体-生殖腺系ホルモンの動態、神経生理学的手法を用いた母川水のニオイ成分及び嗅覚神経系における記銘・想起に関わる因子の解析などで成果を上げることが出来ました。今後は、これまでの研究を集大成し、サケの母川記銘・回帰メカニズムの分子レベルでの解明を行い、我が国の学術研究及び水産業に研究成果を還元したいと考えております。

略 歴

生 年 月 日 昭和26年10月11日
昭和50年 3月 北海道大学水産学部水産増殖学科卒業
昭和52年 3月 北海道大学大学院水産学研究科修士課程修了
昭和55年 3月 北海道大学大学院水産学研究科博士後期課程単位取得退学
昭和55年 4月 } 日本学術振興会奨励研究員
昭和57年 3月 }
昭和55年12月 水産学博士（北海道大学）
昭和57年 4月 } 岡崎国立共同研究機構特別協力研究員
昭和58年 1月 }
昭和58年 2月 産業医科大学助手
昭和59年10月 産業医科大学講師
平成元年 2月 医学博士（産業医科大学）
平成3年 7月 北海道大学水産学部助教授
平成13年 4月 北海道大学北方生物圏フィールド科学センター教授

施設部長

やべ てるお
矢部 輝雄 氏



学生として4年、大学職員として通算7年10箇月の間、北海道大学にお世話になりました。昭和58年に一度北海道大学を離れ、また、平成24年に戻るまでの約30年間は旧文部省、国立天文台、千葉大学、文部科学省、国立大学法人化後の金沢大学、筑波大学で仕事をいたしました。

それぞれに楽しかったこと、厳しかった仕事のことが思い出されますが、いつも、素晴らしい先生・先輩・上司、尊敬する同僚、良き部下に恵まれ前に進むことが出来ました。

火災、地震、洪水などの災害から学生・教職員の安全を守り、研究教育施設環境を整えて優れた人材育成、研究成果創出の基盤を支え続けるという仕事に一貫して携わったこと、たくさんの懸案の解決を後輩に託さざるを得ないながらも、教育研究施設環境が向上してたくさんの方々に喜んでもらえる仕事が出来たことに感謝します。長い間本当にありがとうございました。

これからもますます地域に愛され、より高く世界に羽ばたく北海道大学となることを願っております。

略 歴

生年月日 昭和29年10月23日
 昭和53年3月 北海道大学工学部卒業
 昭和53年6月 北海道大学施設部建築課
 昭和58年4月 文部省管理局教育施設部指導課
 昭和59年7月 文部省大臣官房文教施設部指導課
 昭和62年1月 文部省大臣官房文教施設部指導課防災係主任
 昭和62年4月 文部省大臣官房文教施設部技術課建築第二係主任
 昭和62年8月 文部省大臣官房文教施設部技術課専門職員
 平成5年4月 文部省大臣官房文教施設部技術課技術第一係長
 平成8年4月 国立天文台管理部施設課長
 平成10年7月 千葉大学施設部企画課長
 平成13年10月 文部科学省大臣官房文教施設部技術課技術調査官
 平成15年4月 文部科学省大臣官房文教施設部計画課整備計画室施設点検評価推進専門官
 平成16年4月 文部科学省大臣官房文教施設部企画部計画課整備計画室室長補佐
 平成17年10月 金沢大学施設管理部長
 平成20年8月 筑波大学施設部長
 平成24年4月 北海道大学施設部長

学務部長

にしだ くみこ
西田 久美子 氏



昭和52年に旭川医科大学に勤務以来、同大学と北海道大学にお世話になりました。旭川医科大学では、多くの上司・先輩にご指導いただきましたが、男女共同参画などという言葉もない時代に、こんな鼻柱の強い女子をよくご指導くださったと感謝しております。また、多くの仲間と仕事ばかりではなく、スキー・テニスと大いに遊んだことも楽しい思い出です。

北海道大学では、第1期中期目標・中期計画の策定や初めての法人評価を担当し、数値目標を示すことの難しさ、教育研究の成果・効果をエビデンスに基づき説明することの難しさを痛感したものです。

6年前から学務の仕事に携わりましたが、総合入試に対応した初年次教育や学部移行システム構築など、一緒に悩み考えてくださった先生方やスタッフのおかげで、苦しいけれど楽しい仕事をさせていただきました。大学職員としての終盤に、後輩である学生達のために仕事ができたと有難く思っております。

その後も、学務関係では新渡戸カレッジや新渡戸スクール、道内国立大学の教養教育連携事業等々、新たな取り組みが開始されており、関係する先生方のご尽力と学内の皆様のご協力により、お陰様で順調に進んでおります。有難うございます。

最後になりましたが、北海道大学の益々の発展とお世話になった皆様のご健勝をお祈り申し上げます。有難うございました。

略 歴

生年月日 昭和29年9月30日
 昭和52年3月 北海道大学経済学部卒業
 昭和52年4月 旭川医科大学
 平成6年4月 北海道大学
 平成9年4月 旭川医科大学総務部庶務課人事第一係長
 平成11年4月 旭川医科大学総務部庶務課庶務係長
 平成13年4月 北海道大学総務部企画室専門職員
 平成15年4月 北海道大学学務部教務課専門員（法人移行準備事務局勤務）
 平成16年4月 北海道大学企画部企画調整課課長補佐（経営分析室長兼務）
 平成17年4月 北海道大学企画部経営分析室長
 平成20年4月 北海道大学企画部調査分析課長
 平成21年4月 北海道大学学務部キャリアセンター課長
 平成22年4月 北海道大学学務部教務課長
 平成25年4月 北海道大学学務部長

工学系事務部長

こうの ひでき
構野 秀樹 氏



私は、昭和48年4月に北見工業大学に採用され、その後、北海道大学、旭川医科大学、旭川工業高等専門学校、苫小牧工業高等専門学校と9回の転任を繰り返し、北海道大学で23年間お世話になり、この3月末で定年を迎えることになりました。

この42年の間、諸先輩、同僚、後輩、また関連の先生方などことあるごとにご支援、ご指導いただき無事に終えることができますこと、ただ感謝するばかりです。

勤務して、記憶に残ることとして、採用になった昭和48年は、オイルショックで始まり激動の時代となっていました。

事務処理においても、手書きからタイプライター、ワープロ、パソコンと進化を続け、私自身異動の都度、ついていくのに苦勞した思いが浮かびます。

最後に、北海道大学の益々のご発展と、お世話になった皆様方のご健勝とご活躍を心からお祈りいたします。本当にありがとうございました。

略歴

生年月日	昭和30年2月18日
昭和48年4月	北見工業大会計課
昭和53年4月	北見工業大学附属図書館
昭和55年4月	北海道大学水産学部
昭和59年11月	北海道大学医学部附属病院管理課
昭和62年4月	北海道大学経理部経理課
平成2年4月	旭川医科大学教務部図書課管理係図書管理主任
平成5年4月	北海道大学薬学部会計掛会計主任
平成7年4月	北海道大学施設部企画課工事司計掛工事予算主任
平成10年4月	旭川工業高等専門学校会計課総務係長
平成13年4月	北海道大学総務部総務課秘書掛長
平成15年4月	苫小牧工業高等専門学校会計課長
平成19年4月	旭川医科大学総務部会計課長
平成21年4月	北海道大学財務部経理課長
平成24年4月	北海道大学工学系事務部長

施設部施設企画課長

かとう きみひろ
加藤 公洋 氏



これまで幾多の先輩を定年で送り出しましたが、まさか自分がその立場になろうとは、まさに「光陰矢の如し」のようです。

私は昭和48年5月、北海道大学施設部設備課に採用されました。その当時は、コンピューター、コピー機等が導入されておらず、積算はそろばん、図面は手書きで、大変難儀した記憶があります。今思えばアナログな時代も懐かしく感じられます。

仕事上で印象が深いのは、第1次石油ショックによるスライド対応、埋蔵文化財発掘により、大幅に工期が遅れた恵迪寮建設、改修から改築に方向転換した病院再開発整備等、色々な施設整備を経験させていただきました。

その後、企画的な業務に携わり慣れない文書の作成、他部署との調整で苦勞いたしました。しかし、そのような時も個性豊かな先輩達からの指導、良き同僚、仲間に助けられ、今日まで大過なく勤めることが出来ました。

今後は、微力ながら「仕事」を続け、家庭ではリクエストに答え「育爺」へ変身しつつ、自分の「趣味」の世界を広げていきたいと考えています。

最後になりますが、お世話になりました皆様のご健勝とご活躍を心からお祈りいたします。長い間本当に有り難うございました。

略歴

生年月日	昭和30年1月16日
昭和48年5月	北海道大学施設部設備課
昭和53年3月	北海学園大学経済学部卒業
平成2年4月	北見工業大学施設課設備第一係長
平成4年4月	旭川医科大学業務部施設課機械係長
平成5年4月	北海道大学施設部設備課第二機械掛長
平成8年4月	北海道大学施設部設備課第一機械掛長
平成11年4月	北海道大学施設部企画課企画掛長
平成14年4月	北海道大学施設部企画課専門員
平成16年4月	北海道大学施設部施設企画課専門員
平成16年7月	北海道大学施設部施設保全課課長補佐
平成17年4月	北見工業大学施設課長
平成20年4月	群馬大学施設運営部施設管理課長
平成22年4月	群馬大学施設運営部施設企画課長
平成23年4月	北海道大学施設部施設企画課長

文学研究科・文学部事務長

くほ おさむ
久保 修 氏



昭和56年12月、旭川医科大学から本学に転任となり、その後、2度目の旭川医科大学の4年間の勤務を経て、このたび定年退職を迎えることとなりました。

この間、庶務、会計、医事、入試など多様な分野の事務部門に配置され、種々の業務を経験させていただき、幾度となく大変な困難に直面したこともありましたが、何とか乗り越えることができ今まで勤め上げることができました。

これもひとえに良き上司、先輩、同僚、後輩並びに各部署長や先生方の温かいご指導とご支援のおかげであり、心より深く感謝しお礼を申し上げる次第であります。

国立大学は平成16年の法人化移行後に大きな変革を求める波が次々と打ち寄せてきており、特に、一昨年策定された「国立大学改革プラン」により、今後、大学を取り巻く環境は一層厳しい状況が続くと思いますが、北海道大学の特色を生かして益々発展されますことを祈念いたしますとともに、皆様方のご健勝とご活躍をお祈り申し上げます。

略 歴

生 年 月 日 昭和29年 8 月
昭和50年 7 月 旭川医科大学
昭和56年12月 北海道大学
平成 9 年 4 月 旭川医科大学教務部学生課入学試験係長
平成10年 4 月 旭川医科大学教務部入学主幹付入学試験係長
平成12年 4 月 旭川医科大学総務部会計課専門職員
平成13年 4 月 北海道大学経理部経理課専門職員
平成16年 4 月 北海道大学財務部経理課管理掛長
平成18年 4 月 北海道大学財務部調達課専門員
平成19年 4 月 北海道大学財務部調達課課長補佐
平成22年 4 月 北海道大学環境科学事務部事務長
平成25年 4 月 北海道大学文学研究科・文学部事務長

獣医学研究科・獣医学部事務長

おおもり
大森 あけみ 氏



昭和48年4月1日、低温科学研究所に採用され、このたび定年退職することとなりました。

この間、小樽商科大学を含め42年間の勤務を終え、どの職場においても嬉しかったこと、苦しかったこと色々な場面が思い起こされますが、数多くの方々と親しくご交誼をいただき楽しく過ごすことができました。

こうして永い歳月大過なく勤めることができましたのも、ひとえに理解のある上司、心を割って話し合える同僚、頼りがいのある部下に恵まれ、さらにはご協力ご支援をいただいた各部署の先生方と巡り会えたおかげであり、私にとって最高の幸せであったと感慨を新たにしております。本当に多くの方々に支えていただき心より感謝申し上げます。

最後になりますが、北海道大学が今後益々発展されることを祈念いたしますとともに、皆様方のご健勝とご活躍をお祈り申し上げます。

長い間お世話になり本当にありがとうございました。

略 歴

生 年 月 日 昭和30年 2 月10日
昭和48年 3 月 北海道立室蘭清水丘高等学校卒業
昭和48年 4 月 北海道大学低温科学研究所
平成元年 4 月 北海道大学教養部
平成 4 年 4 月 北海道大学工学部経理課
平成 5 年 4 月 北海道大学工学部経理課第一用度掛調査企画主任
平成 7 年 4 月 北海道大学医学部用度掛企画調査主任
平成10年 4 月 北海道大学農学部経理掛出納管理主任
平成11年 6 月 小樽商科大学会計課専門職員
平成13年 4 月 小樽商科大学会計課用度係長
平成14年 4 月 北海道大学経理部第二契約課第一契約掛長
平成16年 4 月 北海道大学獣医学研究科・獣医学部専門職員
平成19年 4 月 北海道大学財務部調達課課長補佐(兼)財務部調達係長
平成22年 4 月 北海道大学工学系事務部経理課課長補佐
平成23年 4 月 北海道大学医学系事務部会計課課長
平成25年 4 月 北海道大学獣医学研究科・獣医学部事務長

経済学研究科・経済学部事務長

さとう のりひろ
佐藤 憲尋 氏

昭和54年4月に小樽商科大学に採用され、その後北海道大学の外2機関（1機関については改組）併せて計36年間勤務をしてまいりました。担当部署も財務系、施設系、庶務系、研究協力系、医療事務系等いろいろな仕事を経験し、楽しく勤務させていただきましたことに大変感謝しております。

36年間も思えば長いようですが、私にとっては「あっと」言う間に過ぎてしまったような感があります。転勤を含む幾つかの勤務地では、良い思い出（忘年会で100本もの銚子が瞬く間に横になった思い出等）も辛い思い出も数多くありましたが、無事に勤めることが出来たのも、良き上司、先輩、同僚そして後輩等多くの方々のご指導とご協力のおかげと思っております。

様々なことがありましたが、何とか定年退職を迎えることが出来たことも、ひとえに皆様のおかげと心から感謝申し上げます。

最後になりますが、緑豊かで基幹総合大学でもある北海道大学のますますの発展と今後の皆様のご健康とご活躍を心からお祈り申し上げます。本当に長い間、ありがとうございました。

略 歴

生年月日 昭和30年1月10日
 昭和53年3月 北海学園大学法学部卒業
 昭和54年4月 小樽商科大学庶務課
 昭和61年12月 北海道大学低温科学研究所
 平成8年4月 放送教育開発センター管理部研究協力課連携協力第一係長
 平成9年4月 メディア教育開発センター事業部研究協力課専門職員
 平成11年4月 北海道大学歯学部業務課専門職員
 平成13年4月 文部科学省大臣官房文教施設部札幌工事事務所庶務係長
 平成16年4月 北海道大学施設部施設企画課整備契約掛長
 平成19年4月 北海道大学農学事務部事務長補佐
 平成22年4月 北海道大学工学系事務部総務課課長補佐
 平成24年4月 北海道大学経済学研究科・経済学部事務長

■ 諸会議の開催状況

役員会（平成27年 2月 9日）

- 議 案・学校教育法の改正に伴う教授会審議事項等への対応について
- ・教育研究組織の長、副長及び附属施設の長の任命及び選考等に係る規程について
 - ・教員の人事等に関する特例規則について
 - ・教育研究評議会規程について
 - ・教員の懲戒審査手続きについて
 - ・就業規則関連規程の一部改正について
 - ・諸規則の制定及び一部改正について
 - ・北海道地区国立大学の教養教育連携実施に関する協定書の一部改正について
 - ・「医学、獣医学、農学及び経済学系大学院設置構想委員会」の設置について
 - ・平成26年度教育研究支援業務総長表彰について
- 協議事項・特任教授からの副学長任命等について
- ・高等教育推進機構の組織再編について
 - ・クロスアポイントメント制度の導入について
 - ・就業規則関連規程の制定及び一部改正について
 - ・諸規則の一部改正について
- 報告事項・平成25年度における国立大学法人及び大学共同利用機関法人の業務の実績に関する評価の結果への意見について
- ・超過勤務実績について
-

教育評議会（平成27年 2月18日）

- 議 題・特任教授からの副学長任命等について
- ・高等教育推進機構の組織再編について
 - ・クロスアポイントメント制度の導入について
 - ・諸規則の制定及び一部改正について
 - ・教員の懲戒について
- 報告事項・平成25年度における国立大学法人及び大学共同利用機関法人の業務の実績に関する評価の結果への意見について
- ・全学運用教員の措置について
 - ・寄附分野等の終了等について
-

役員会（平成27年 2月23日）

- 議 案・特任教授からの副学長任命等について
- ・高等教育推進機構の組織再編について
 - ・諸規則の一部改正について
 - ・「外国人教員の積極的採用のための方策」及び「女性教員の積極的採用のためのポジティブアクション北大方式」の拡充について
 - ・目的積立金の活用事業について
- 協議事項・平成27年度北海道大学予算編成方針について
- ・就業規則関連規程の一部改正について
- 報告事項・創成研究機構による設置時限のない構成組織の評価結果について
- ・COI拠点への昇格について
 - ・平成26年度運営費交付金の追加配分について
-

※規程の制定、改廃については、「学内規程」欄に掲載しております。

■ 学内規程

国立大学法人北海道大学教育研究組織の長の選考及び任期に関する規程の一部を改正する規程

(平成27年2月16日海大達第6号)

国立大学法人北海道大学副研究科長及び副研究院長の任命等に関する規程の一部を改正する規程

(平成27年2月16日海大達第7号)

国立大学法人北海道大学特任教員就業規則の一部を改正する規則

(平成27年2月16日海大達第8号)

国立大学法人北海道大学における教員の人事等に関する特例規則の一部を改正する規則

(平成27年2月16日海大達第9号)

学校教育法及び国立大学法人法の趣旨を踏まえた内部規則等の総点検・見直しに伴い、所要の改正を行ったものです。

国立大学法人北海道大学における教員の人事等に関する特例規則に基づく審査規程の一部を改正する規程

(平成27年2月16日海大達第10号)

教員の懲戒審査等手続きについて見直しを行うことに伴い、所要の改正を行ったものです。

国立大学法人北海道大学における教員の任期に関する規程の一部を改正する規程

(平成27年3月1日海大達第11号)

水産科学研究院の研究院長付に採用する助教について、大学の教員等の任期に関する法律第4条第1項第2号の規定に基づき任期を定めることに伴い、所要の改正を行ったものです。

■ 表敬訪問

国内

年月日	来訪者
27.2.24	日東電工株式会社 代表取締役 取締役社長 高崎 秀雄 氏
27.2.24	株式会社日立製作所 相談役 川村 隆 氏



日東電工株式会社 代表取締役
取締役社長 高崎 秀雄 氏 (右側)



株式会社日立製作所 相談役
川村 隆 氏 (左側)

(総務企画部広報課)

海外

年月日	来訪者	来訪目的
27.2.4	駐日米国大使館 Caroline Bouvier Kennedy 特命全権大使	陽子線治療センターの視察及び学生との懇談
27.2.5	駐日オーストラリア大使館 Bruce Miller 特命全権大使	講演
27.2.12	スコルコヴォ科学技術大学（ロシア）Edward Crawley 学長	両大学の交流に関する懇談
27.2.13	東南大学（中国）劉 京南 常務副書記	両大学の交流に関する懇談
27.2.19	マサチューセッツ大学アマースト校（米国）Katherine S. Newman 学務担当副学長	講演
27.2.19	ボゴール農業大学（インドネシア）Dahrul Syah 研究科長	講演
27.2.24	Indian Institutes of Science Education and Research（インド）一行	両機関の交流に関する懇談
27.3.2	ニーデ大学（トルコ）Adnan Gorur 学長	両大学の交流に関する懇談
27.3.3	ラップランド大学（フィンランド）Mauri Ylä-Kotola 学長	両大学の交流に関する懇談



駐日米国大使館 Caroline Bouvier Kennedy 特命全権大使（左から5人目）



駐日オーストラリア大使館 Bruce Miller 特命全権大使（中央）



スコルコヴォ科学技術大学（ロシア）Edward Crawley 学長（右から2人目）



東南大学（中国）劉 京南 常務副書記（左から5人目）



マサチューセッツ大学アマースト校（米国）Katherine S. Newman 学務担当副学長（左から3人目）



ボゴール農業大学（インドネシア）Dahrul Syah 研究科長（左側）



Indian Institutes of Science Education and Research（インド）一行



ニーデ大学（トルコ）Adnan Gorur 学長（左から3人目）



ラップランド大学（フィンランド）Mauri Ylä-Kotola 学長（左側奥）

（国際本部国際連携課，学務部学務企画課）

■人事

平成27年2月16日付発令

新 職 名 (発令事項)	氏 名	旧 職 名 (現職名)
【准教授】 大学院情報科学研究科准教授 大学院地球環境科学研究院准教授	松 元 慎 吾 七 分 勇 勝	採用 大学院地球環境科学研究院助教
【技術職員等】 北海道大学病院診療支援部臨床検査技師	増 田 裕 弥	採用

平成27年2月28日付発令

新 職 名 (発令事項)	氏 名	旧 職 名 (現職名)
【技術職員等】 (辞職)	上田 いづみ	北海道大学病院看護部看護師

平成27年3月1日付発令

新 職 名 (発令事項)	氏 名	旧 職 名 (現職名)
【講師】 北海道大学病院講師	蒲 池 浩 文	採用
【助教】 大学院医学研究科助教 大学院水産科学研究院助教 大学院保健科学研究院助教 大学院保健科学研究院助教 遺伝子病制御研究所助教	大 平 洋 CHITTENDEN ANTHONY ROBERT 岡 田 一 範 古 川 貴 之 有 馬 康 伸	採用 採用 採用 採用 採用
【主任】 施設部施設企画課付主任	中 庭 智 宏	函館キャンパス事務部主任
【係員】 医学系事務部総務課 (出向復帰) 総務企画部人事課 (出向) 一橋大学総務部評価・広報課	川 口 麻 里 子 進 藤 千 恵 美 進 藤 千 恵 美	採用 大学評価・学位授与機構評価事業部評価支援課 総務企画部人事課
【技術職員等】 水産学部附属練習船うしお丸二等機関士	杉 原 明	水産学部附属練習船おしよろ丸操機手

訃報

名誉教授 やぎ こういち 八木 康一 氏
(享年89歳)



名誉教授 八木康一氏は、平成27年2月19日逝去されました。ここに生前のご功績を偲び、謹んで哀悼の意を表します。

先生は、大正15年1月5日小樽市に生まれ、昭和24年3月に北海道帝国大学理学部化学科を卒業、引き続き同大学院に進学、同27年4月同大学理学部助手に任ぜられました。昭和33年5月には、同大学から理学博士の学位を授与されました。昭和35年2月同大学講師、同37年12月助教授を経て、同41年4月に教授に昇任し、平成元年3月北海道大学を停年退官後、同大学名誉教授の称号を授与されました。引き続き、

酪農学園大学嘱託教授に就任し平成8年3月同大学を退職されました。この間、筋タンパク質とカルシウム結合タンパク質の生化学的研究を精力的に行われました。特に、筋収縮に必須の役割を果たすミオシンの機能部位断片(S-1)の分割と精製法を確立した成果は特筆に値します。また、ミオシンのリン酸化の意義を研究する過程で、カルモジュリンがミオシン軽鎖キナーゼの活性化因子として機能することを発見されました。細胞内シグナル伝達系のセカンドメッセンジャーとしてのCa²⁺/カルモジュリンの生理機能を確立された業績は、国際的に高く評価されています。平成2年12月から同5年3月までの冬季間は、アメリカ国立衛生研究所(NIH)のFogarty Scholarとして、当時最先端の技術であったPCR法を用いた組換えDNA実験にも取り組まれました。以後平成16年3月までは北海三共株式会社農業科学研究所研究員としてアツモリソウの分子系統学的研究に従事されました。平成18年春には、永年にわたる教育・研究上の多

大な貢献により、瑞宝中綬章を受章されました。

学内においては、当時の教養部において「生命現象と生化学」という総合講義を、一方で、生命科学系の大学院生を対象に全学レベルの「生化学共通講義」を企画担当し、若い学生に生命現象に対する興味を喚起することに貢献されました。また、公開講座委員会委員、大学院委員会委員などを務め、大学行政上においても多方面にわたり貢献されました。学外では、学術審議会専門委員、独立行政法人日本学術振興会専門委員、公益社団法人日本生化学会北海道支部長等を歴任され、生化学の発展に寄与されました。

以上のように、先生は生化学の分野における優れた研究業績によって学術上の進歩に寄与されると共に、教育及び行政上においても尽力されました。

ここに謹んで先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

(理学院・理学研究院・理学部)

編集メモ

●3月になり、だんだん日も長くなってきました。日中の気温が10度位になる日もあり、少しずつ春の訪れを感じられるようになりました。キャンパス内の雪もほとんどなくなっています。

●インフォメーションセンター「エルクの森」では、3月下旬より新しい企画展示を行っています。4Kテレビを利用しての映像もありますので、ぜひご覧ください。



2014.3.22 室蘭本線 大岸～礼文（豊浦町）

北の鉄道風景 24 去り行く寝台列車

北陸新幹線の開業，北海道新幹線の開業準備や客車・機関車の老朽化などを理由に，北海道内を走行する3つの寝台列車のうち，「トワイライトエクスプレス」と「北斗星」が本年3月をもって運行終了となる。残る「カシオペア」は4月以降も運行が継続されるが，こちらも1年後に迫った北海道新幹線（新青森～新函館北斗）の開業前に廃止となる可能性が高いようだ。新幹線の開業と引き替えに，魅力

ある列車が次々と北海道から消えてゆくことに一抹の寂しさを感じる。写真は豊浦町の礼文華海岸を走り去る「トワイライトエクスプレス」である。絶景を背景に，夕日を浴びながら走る同列車を見ることができるのも今月限りとなる。

情報科学研究科 准教授 山本 学

北大時報 ③ No.732 平成27年3月発行

北海道大学総務企画部広報課 〒060-0808 札幌市北区北8条西5丁目

TEL：(011) 706-2610 / FAX：(011) 706-2092 / E-mail：kouhou@jimuhokudai.ac.jp

北大時報はインターネットでもご覧いただけます。http://www.hokudai.ac.jp/pr/publications/jihou.html